仙台市文化財調査報告書第 447 集

燕沢遺跡第 14 次調査

―国道 4 号仙台バイパス拡幅工事に伴う発掘調査報告書―

2016 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

国土交通省東北地方整備局

仙台市文化財調査報告書第 447 集

燕沢遺跡第 14 次調査

―国道 4 号仙台バイパス拡幅工事に伴う発掘調査報告書―

2016 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

国土交通省東北地方整備局

序　　文

仙台市の文化財保護行政につきまして、日ごろからご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。

市内には、旧石器時代から近世に至るまで数多くの埋蔵文化財が遺されています。当市教育委員会といたしましても、先人たちの残した貴重な文化財を保護し、保存・活用を図りながら、次の世代に引き継いでいくことは、これからの「まちづくり」に欠かせない大切なことと考えております。

本報告書は、国道 4 号仙台バイパス拡幅工事に伴う本発掘調査の成果をまとめたものです。仙台バイパスは交通量が非常に多く、工事の計画地内付近では交通渋滞が発生していました。渋滞緩和のために拡幅工事が計画され、その工事計画地に燕沢遺跡が含まれていたため、本発掘調査を実施することになりました。

燕沢遺跡は、これまで 13 次にわたる調査が実施されており、古代の僧坊跡と考えられる掘立柱建物跡等が確認され、その建物に葺いていたと推測される瓦や漆紙文書などが発見されていることから、古代の重要施設があったと推定される遺跡です。調査の結果、古代の竪穴住居跡と溝跡、縄文時代前期の竪穴住居跡が確認されました。本報告書が学術研究はもとより、市民の皆様に広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに調査報告書の刊行にあたり、事業者である国土交通省東北地方整備局をはじめ、多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

平成 28 年 3 月

仙台市教育委員会
教育長　　大越　裕光

例　言

1．本書は国道４号仙台バイパス拡幅工事に伴い、仙台市教育委員会が実施した本発掘調査の成果について まとめたものである。
2．本書の執筆・編集は、庄子裕美が担当した。
3．本発掘調査の実施ならびに報告書作成に際し、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所より協力を得た。
4．発掘調査および資料の整理に際して、次の方々と関係機関から多くのご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(五十音順・敬称略)
　石橋宏、菅野智則、柴田恵子、芳賀文絵、東北歴史博物館
5．調査・整理に関するすべての資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　例

1．本書に使用した地形図は、国土地理院発行の１：50,000 地形図「仙台」の一部を改変・縮小して使用している。
2．遺構図の座標値は「世界測地系」を基準とし、記載している。図中の方位北は座標北を基準とした。
3．本書に使用した標高値は海抜高度（Ｔ．Ｐ．）を示す。
4．本文及び土層注記表に記載している土色は、『新版　標準土色帖』（小山・竹原　2010）に基づいて設定した。
5．検出遺構については以下の遺構記号を使用し、遺構別に番号を付した。
　　ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＤ：溝跡　ＳＫ：土坑　Ｐ：柱穴、ピット
6．出土遺物の登録には以下の遺物記号を使用し、種別毎に番号を付した。
　　Ａ：縄文土器　Ｂ：弥生土器　Ｄ：ロクロ土師器・赤焼土器　Ｅ：須恵器
　　Ｆ：丸瓦　Ｇ：平瓦　Ｋ：石器　Ｎ：金属製品
7．遺物実測図の縮尺はスケールを全ての図中に付した。
8．遺構図と遺物実測図に使用したスクリーントーンは、凡例を図中に示した。
9．遺物観察表の（　　）内の数字は復元値を、「―」表記は計測不能を示している。
10．本文中の石器の記述については、石器の遺物実測図の左側を「表面」、右側を「裏面」とした。
11．遺物写真には遺物の登録番号と写真の略縮尺を記載した。

目　次

序　文
例言・凡例
目　次
第１章　燕沢遺跡と調査の概要 ……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査要項……1
　第３節　遺跡の地理的環境と歴史的環境……1
　第４節　調査の方法と経緯……4
第２章　基本層序 ……5
第３章　検出遺構と出土遺物……10
　（1）竪穴住居跡 ……10
　（2）溝跡 ……15
　（3）土坑 ……16
　（4）ピット ……23
　（5）遺構外出土遺物 ……24
第４章　まとめ……27
　第１節　縄文時代 ……27
　第２節　古代 ……28

第１章　燕沢遺跡と調査の概要

第１節　調査に至る経緯

燕沢遺跡第 14 次発掘調査は、平成 27 年度に仙台市宮城野区燕沢東三丁目地内で計画された国道 4 号仙台バイパス拡幅工事に伴う埋蔵文化財の本発掘調査である。

燕沢遺跡内で国道 4 号の 6 車線化に伴う拡幅工事が計画されたことから、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所より、平成 26 年 4 月 21 日付、国東整仙二調第 3 号「一般国道 4 号仙台拡幅事業計画と埋蔵文化財のかかわりについて (協議)」(平成 26 年 5 月 19 日付、教生文第 109-7 号により県通知を伝達) が仙台市教育委員会 に提出された。これを受け、協議の結果、工事計画地内では本発掘調査が必要とされ、仙台河川国道事務所から提出された、平成 26 年 6 月 27 日付、国東整仙二調第 7 号「埋蔵文化財発掘の通知について」(平成 26 年 7 月 22 日付、教生文第 107-13 号により県通知を伝達) に基づき、平成 27 年 9 月 1 日より本発掘調査を実施した。

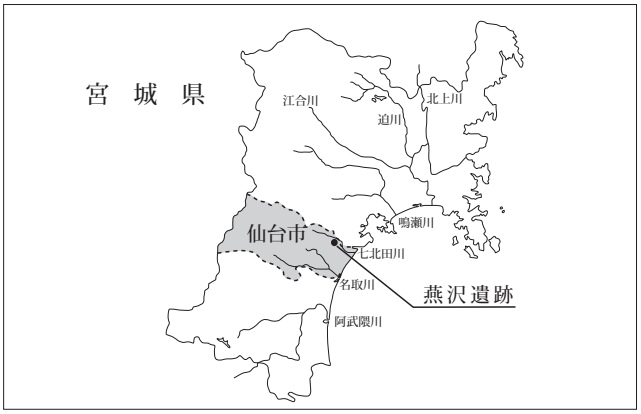
第２節　調査要項

遺跡名	燕沢遺跡（宮城県遺跡登録番号　01001)
所在地	仙台市宮城野区燕沢東三丁目地内
調査原因	国道 4 号仙台バイパス拡幅工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会生涯学習部文化財課調査調整係　主事　庄子裕美　　文化財教諭　笹原　惇
調査期間	平成 27 年 9 月 1 日～平成 27 年 11 月 30 日
調査対象面積	774.5㎡
調査面積	540㎡
整理期間	平成 27 年 12 月 1 日～平成 28 年 3 月 28 日

第３節　遺跡の地理的環境と歴史的環境

１．地理的環境

燕沢遺跡は仙台市の北東部の JR 東仙台駅の北東約 2㎞に位置する。仙台市域の地形は、西から東にかけて山地・丘陵地・低地に大別される。丘陵地には奥羽山脈から東に分岐する富谷・七北田丘陵があり、その東端は台原・小田原丘陵と呼ばれている。燕沢遺跡は台原・小田原丘陵の最東端の段丘上にあり、標高は 20 ～ 30 m で、周辺の沖積平野と比べると 15 ～ 20 m高い。



第１図　燕沢遺跡の位置図

※国土地理院発行 平成14年「仙台」1：50,000を一部改変

	遺跡名	種別	時代
1	燕沢遺跡	散布地・集落跡・寺院跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
2	善応寺横穴群	横穴墓	古墳
3	善応寺東横穴群	横穴墓	古墳
4	比丘尼塚古墳	円墳	古墳
5	小鶴城跡	城館跡	中世
6	糠塚古墳	円墳	古墳
7	吉沢遺跡	散布地	平安
8	千人塚古墳	円墳	古墳
9	山崎囲遺跡	散布地	縄文
10	耕田寺板碑群	板碑	中世

	遺跡名	種別	時代
11	燕沢公園窯跡	窯跡	古墳・奈良
12	大蓮寺窯跡	窯跡	古墳・奈良
13	稲荷館跡	城館跡	中世
14	岩切畑中遺跡	集落跡・包含地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
15	大正囲遺跡	散布地	平安
16	笹森城跡	城館跡	中世
17	今市遺跡	集落跡・包含地	平安・中世
18	鴻ノ巣遺跡	集落跡・屋敷跡・水田跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世
19	洞ノ口遺跡	集落跡・城館跡・屋敷跡・水田跡	古墳・奈良・平安・中世・近世

第２図　燕沢遺跡の位置と周辺の遺跡

２．歴史的環境

燕沢遺跡の周辺には七北田川両岸の丘陵部分と自然堤防部分を中心に数多くの遺跡が分布している。

仙台市内の縄文時代の遺跡は丘陵・段丘上や沖積平野の自然堤防上で確認されている。燕沢遺跡の周辺では岩切畑中遺跡で縄文土器が採集されているが、遺構は確認されていない。

古墳時代では、鴻ノ巣遺跡で古墳時代中期の竪穴住居跡や溝跡などが、燕沢遺跡で古墳時代前期の竪穴住居跡が確認されており、居住域が存在していたことが判明している。七北田川流域の自然堤防上では、古墳時代の終末期から奈良時代にかけて善応寺、東光寺、台屋敷、入生沢で横穴墓群が造営される。このうち善応寺横穴墓群には 100 基を超える横穴墓があると推定されており、昭和 53 年 (1978) に仙台市指定史跡になっている。このうち 23 基の横穴墓で発掘調査が実施されており、土師器や須恵器、鉄刀、鉄鏃、ガラス製小玉、金銅環などが出土している。大蓮寺窯跡では古墳時代中期の須恵器を焼いた窯跡が見つかっており、東北地方で発見されている最古の須恵器窯跡である。また大蓮寺窯跡では７世紀末から８世紀初頭の単弁蓮華文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦が出土している。

奈良時代になると燕沢遺跡の東北東側約 5㎞の位置に陸奥国府である多賀城が神亀元年 (724) に造営される。燕沢遺跡の南南西約 5㎞の位置に陸奥国分寺・国分尼寺が天平 13 年 (741) に出された詔によって造営される。多賀城

と陸奥国分寺・国分尼寺に供給される瓦の生産は台原・小田原丘陵上で行われ、一大窯業地帯として栄えていたとことが判明している。燕沢遺跡でも、宝相華文軒丸瓦など多賀城Ⅳ期の瓦が出土している。

3．過去の調査の概要

燕沢遺跡は昭和 25 年 (1950) に刊行された『仙臺市史３　別編１』の中で表採された単弁蓮華文軒丸瓦が紹介されており、古代の瓦が散布していることで注目された遺跡である。

燕沢遺跡内では昭和 56 年 (1981) の宅地造成に伴う発掘調査をはじめとし、これまで 13 次にわたる発掘調査が実施されている (表 1)。遺構の残存状況は良好ではないが、竪穴住居跡や溝跡、掘立柱建物跡などが確認されている。このうち今回の調査区の西側に隣接する第 8 次調査では、南北 4 間、東西 7 間以上の二面廂の掘立柱建物跡 (SB2) が検出されており、寺院の「僧房」と推定されている。SB2 掘立柱建物跡の北側 15 mの位置には、建物と同じ方向の溝跡 (SD7) が検出されており、建物群を区画した溝と考えられ、建物跡と溝跡は出土した遺物から 10 世紀前半代の時期と考えられている。また、第 8 次調査の南側の第 9 次・第 10 次調査でも掘立柱建物跡 (SB3、SB5) が検出されている。SB3 建物跡は出土遺物から 9 世紀後半から 10 世紀前半のものと考えられ、建物の方向の違いから SB2 建物跡と SB3 建物跡は建てられた時期が異なると考えられる。遺物の中には瓦が多数含まれており、多賀城創建期以前の瓦と多賀城Ⅱ期以降の瓦が確認されている。そのほか第 2 次調査では竪穴住居跡から『右婦人ヵ』と書かれた漆紙文書と陶硯が、第 2 次、第 3 次、第 9 次調査では墨書土器が出土しており、底部に『讀院□』と墨書されている須恵器坏がある。これまでの調査での遺構の検出状況と出土遺物から燕沢遺跡内には瓦葺きの建物が存在し、寺院もしくは官衙などの古代の重要施設が存在していたことが考えられる。

調査次数	調査原因	調査年度	調査面積	主な発見遺構	主な出土遺物
1次	宅地造成	1981	720㎡	【平安】掘立柱建物跡、溝跡、土坑	【弥生】石庖丁 【古墳】土師器 【飛鳥・奈良】丸瓦、平瓦 【平安】ﾛｸﾛ土師器、須恵器、灰釉陶器、丸瓦、平瓦
2次	区画整理	1982	3,750㎡	【古墳】竪穴住居跡 【平安】竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑	【縄文】縄文土器(繊維土器)、石器 【弥生】弥生土器(弥生時代中期) 【古墳】土師器 【飛鳥・奈良】丸瓦、平瓦 【平安】ﾛｸﾛ土師器、墨書土器、赤焼土器、須恵器、陶硯、漆紙文書、軒平瓦、丸瓦、平瓦
3次	擁壁工事	1987	350㎡	【平安】竪穴住居跡、溝跡	【縄文】縄文土器（繊維土器）、石器 【弥生】弥生土器 【飛鳥・奈良】軒平瓦、丸瓦、平瓦 【平安】ﾛｸﾛ土師器、墨書土器、須恵器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦
4次	宅地造成	1989	338㎡	【平安】竪穴住居跡、掘立柱建物跡	【飛鳥・奈良】平瓦 【平安】ﾛｸﾛ土師器、丸瓦、平瓦
5次	宅地造成	1990	300㎡	【奈良】土坑 【平安】竪穴住居跡、竪穴状遺構、土坑	【飛鳥・奈良】土師器 【平安】ﾛｸﾛ土師器、赤焼土器、須恵器、軒丸瓦、丸瓦、平瓦
6次	宅地造成	1990	105㎡	【古墳】竪穴住居跡？ 【平安】溝跡	【平安】丸瓦、平瓦
7次	範囲確認	1993	400㎡	【古代】竪穴住居跡 【平安】掘立柱建物跡、溝跡	【古代】土師器 【飛鳥・奈良】軒平瓦、丸瓦、平瓦 【平安】軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦
8次	範囲確認	1994	400㎡	【平安】掘立柱建物跡(僧坊)、溝跡、竪穴遺構	【飛鳥・奈良】軒丸瓦、丸瓦、平瓦 【平安】ﾛｸﾛ土師器、赤焼土器、須恵器、灰釉陶器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鉄製品(鍬先)
9次	範囲確認	1995	450㎡	【平安】掘立柱建物跡、竪穴遺構	【飛鳥・奈良】軒丸瓦、平瓦 【平安】ﾛｸﾛ土師器、墨書土器、須恵器、軒平瓦、丸瓦、平瓦
10次	範囲確認	1996	400㎡	【平安】柱列、溝跡、竪穴遺構	【飛鳥・奈良】平瓦 【平安】ﾛｸﾛ土師器、須恵器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦
11次	範囲確認	1997	400㎡	【平安】柱列 竪穴住居跡、性格不明遺構、土坑	【飛鳥・奈良】軒平瓦、丸瓦、平瓦 【平安】ﾛｸﾛ土師器、須恵器、陶硯、丸瓦、平瓦
12次	宅地造成	2005	36㎡	溝跡	【平安】ﾛｸﾛ土師器、平瓦
13次	個人住宅建築	2009	21㎡	性格不明遺構、ピット	【飛鳥・奈良】平瓦 【平安】ﾛｸﾛ土師器、丸瓦、平瓦
14次	道路拡幅	2015	540㎡	【縄文】竪穴住居跡、土坑 【平安】竪穴住居跡 、溝跡	【縄文】縄文土器、石器 【飛鳥・奈良】軒平瓦、丸瓦、平瓦 【平安】ﾛｸﾛ土師器、須恵器、赤焼土器、軒平瓦、丸瓦、平瓦

表１　燕沢遺跡の発掘調査概要

第４節　調査の方法と経過

１．調査の方法

調査区は拡幅工事の法面掘削部分にあたる範囲を対象とし、幅約５ｍ×長さ約 120 ｍで調査面積は 540㎡である。調査区を南側からⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区、Ⅴ区とした。

調査の計測作業は用地測量で設置された基準点を原点として使用し、調査区の周辺に新たな基準点を設置して行った。

表土掘削はバックホー 0.25㎥を使用し、Ⅰ区はⅣ層上面、Ⅱ区はⅢｂ層上面、Ⅲ区はⅣ層上面、Ⅳ区はⅢａ層とⅢｂ層上面、Ⅴ区はⅢａ層上面で遺構検出を行った。

検出遺構は必要に応じて写真撮影、断面図、平面図、土層注記の記録をとった。写真撮影はデジタルカメラを使用した。平面図はトータルステーションを使用し、ＣＡＤソフトで計測を行い、断面図は手実測による縮尺 20 分の 1 の図面を作成し、作図・編集をグラフィックソフト Illustrator（Adobe Systems）で作図した。

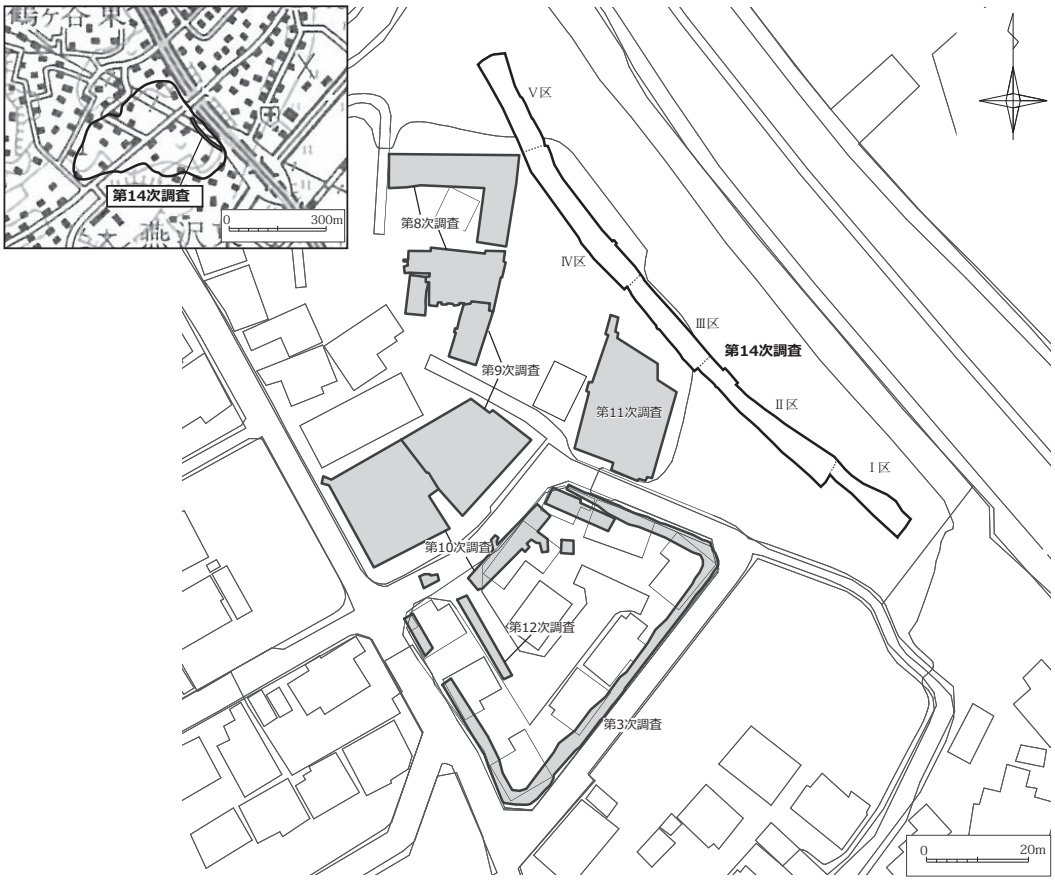
２．調査の経過

(1) 野外調査

野外調査は平成 27 年９月１日から 11 月 30 日の間で計 37 日間行った。９月３日から調査区周辺の除草・伐採などの環境整備を行い、環境整備の終了後にⅠ区の南側とⅤ区の北側から重機で表土掘削を行った。掘削が終了した箇所から人力による遺構確認の作業を行った。10 月５日からⅣ区とⅤ区で検出された遺構の調査を開始し、11 月６日には全ての遺構の調査を終了した。11 月９日に埋戻しを実施し、11 月 30 日に野外調査を終了した。

(2) 整理作業

整理作業は平成 27 年 12 月１日から平成 28 年３月 28 日の期間で実施した。



第３図　調査区の位置図

第２章　基本層序

今回の調査で確認した基本層は現代の盛土を除き、大別５層、細別８層である。Ⅰ区では調査区全面で攪乱が確認されており、遺構面まで削平されたと考えられる。以下、基本層の概要である。

Ⅰ層　畑の耕作土。色調と含有物で３層に分層した。

Ⅰａ層：暗褐色シルトである。層厚は５～80㎝である。

Ⅰｂ層：黒褐色粘土質シルトである。Ⅴ区で確認された。層厚は０～30㎝である。

Ⅰｃ層：黒褐色粘土質シルトである。凝灰岩粒を少量含む。層厚は０～20㎝である。

Ⅱ層　黒褐色粘土質シルトである。Ⅱ区の南側の一部で確認された。層厚は０～20㎝である。Ⅰｃ層の母材層と考えられる。

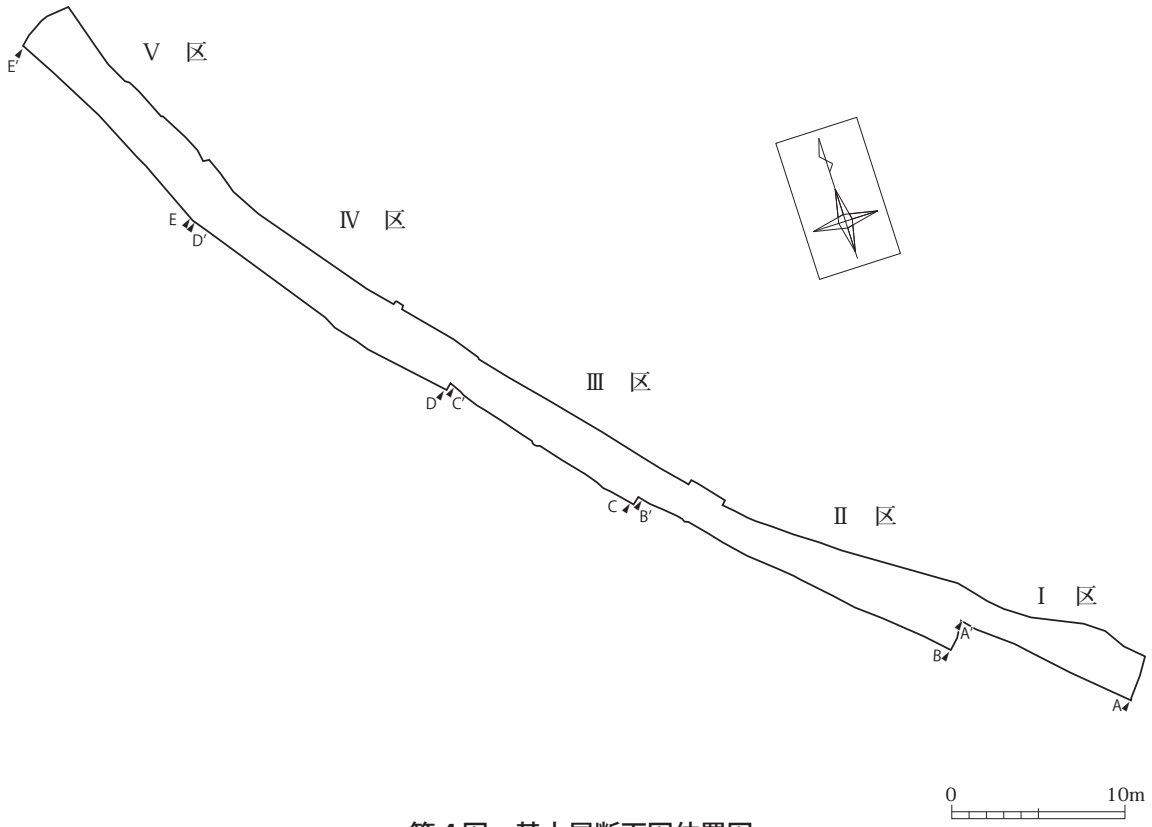
Ⅲ層　黄褐色粘土であり、含有物で２層に細分した。

Ⅲａ層：黄褐色粘土である。層厚は０～15㎝である。Ⅳ区とⅤ区の遺構検出面である。

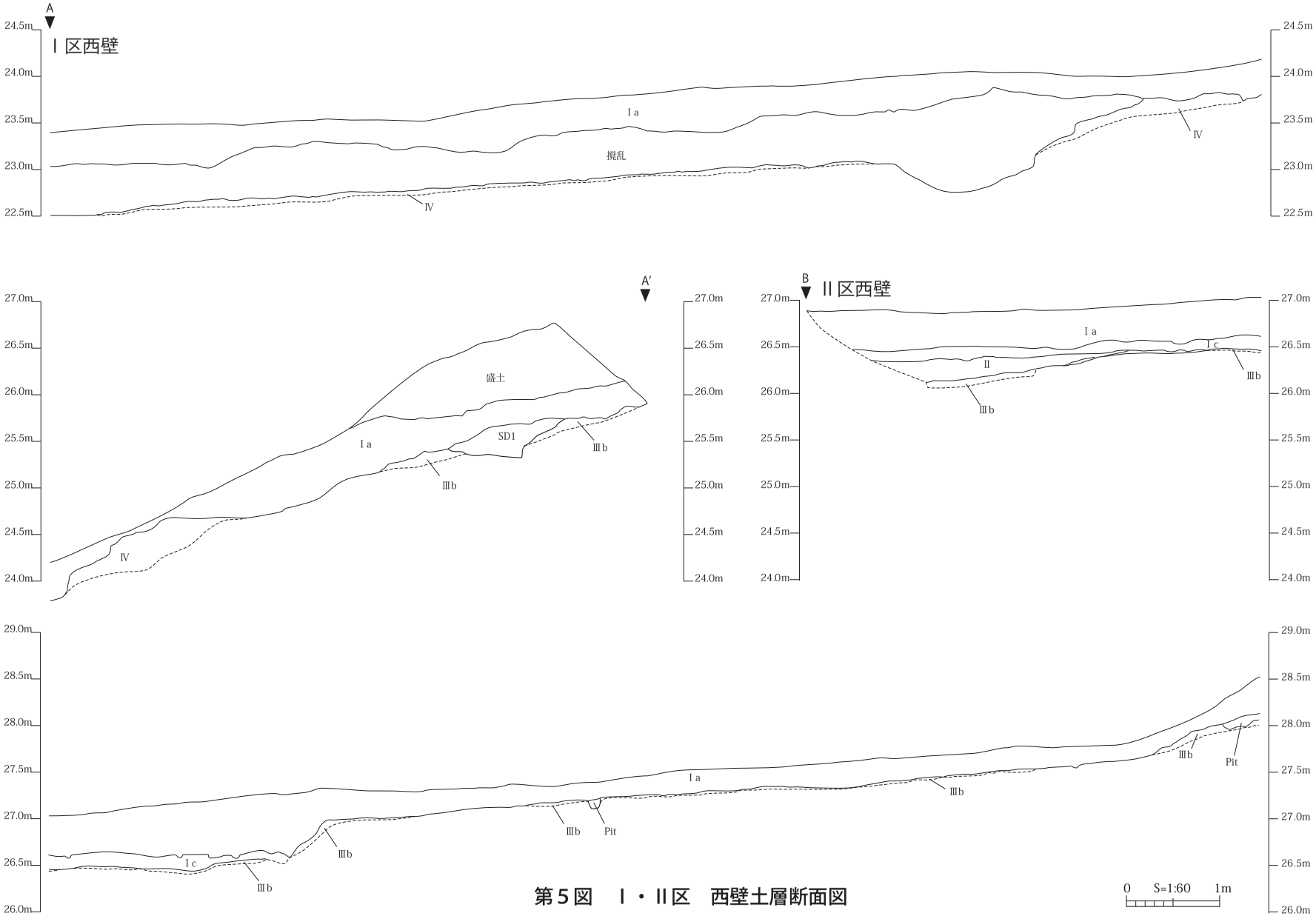
Ⅲｂ層：黄褐色粘土で、風化した凝灰岩ブロック（径10～50㎜）、と凝灰岩粒を少量含んでいる。Ⅱ区とⅣ区の一部の遺構検出面である。層厚は０～35㎝以上である。

Ⅳ層　にぶい黄色の風化した凝灰岩である。しまりがあり、非常に硬い。Ⅲ区の遺構検出面である。層厚は10～40㎝以上である。

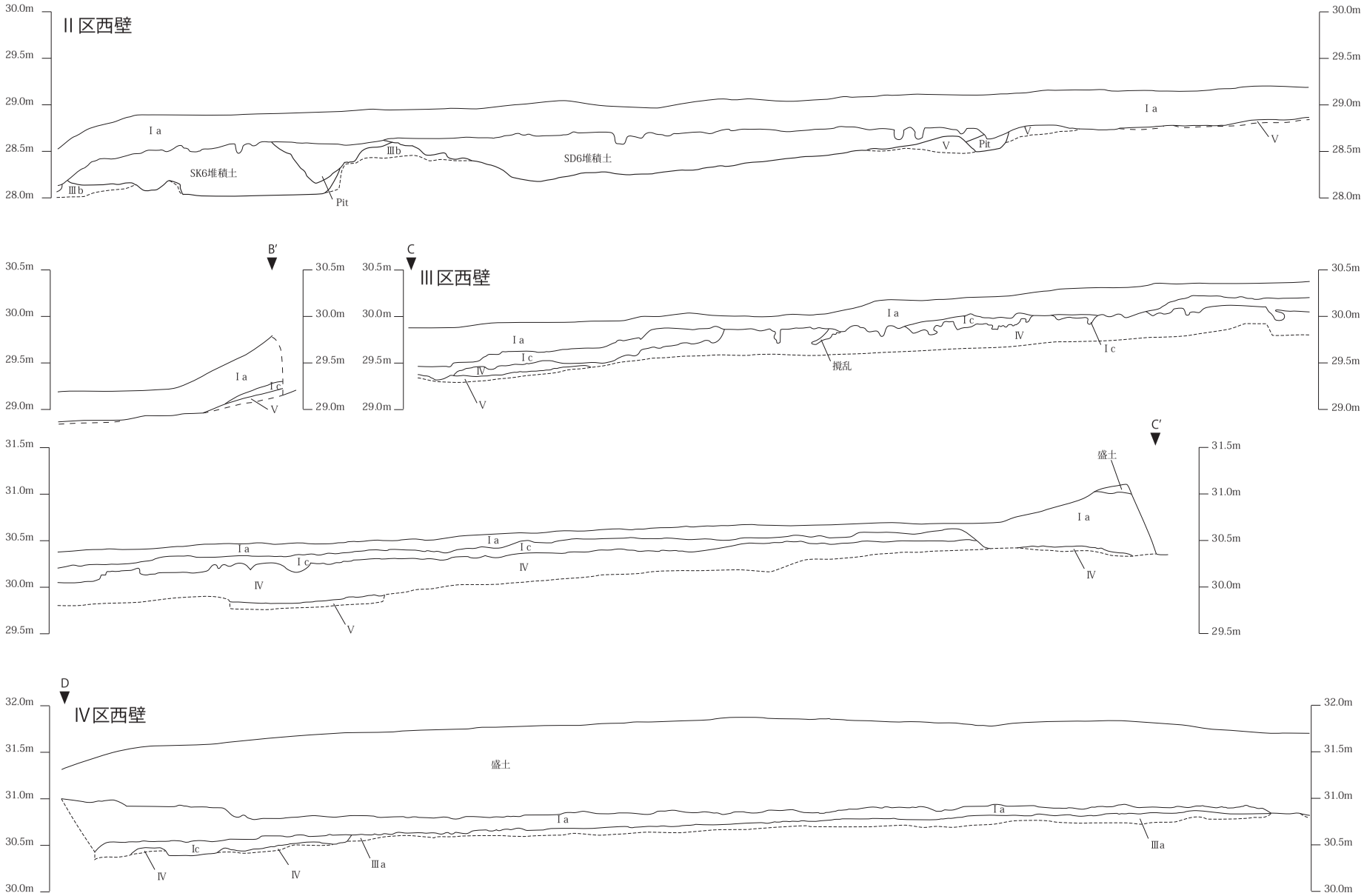
Ⅴ層　黄褐色の粘土である。小礫と凝灰岩粒、砂を多量に含む。層厚は40㎝以上である。



第４図　基本層断面図位置図

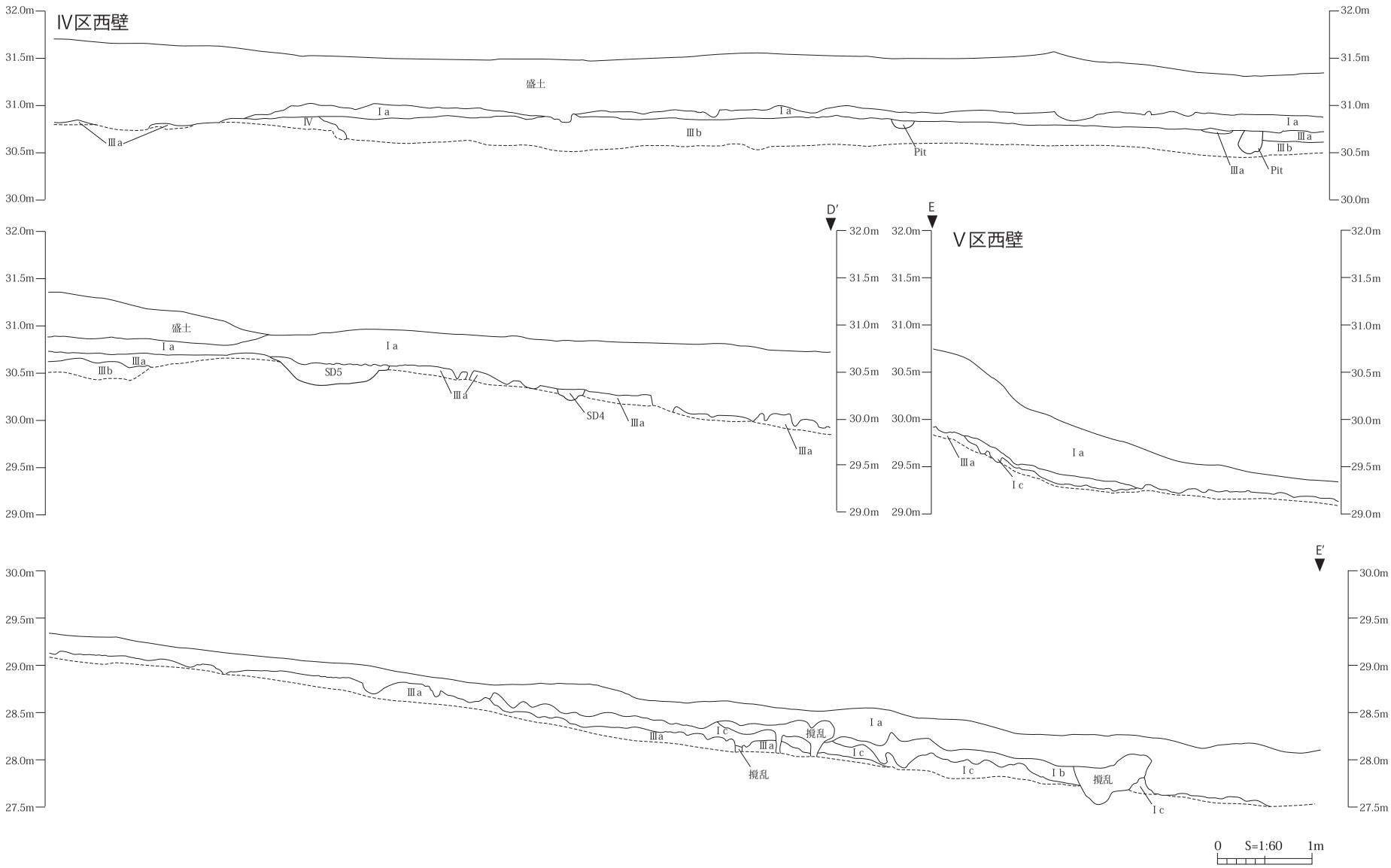


第５図　Ⅰ・Ⅱ区　西壁土層断面図

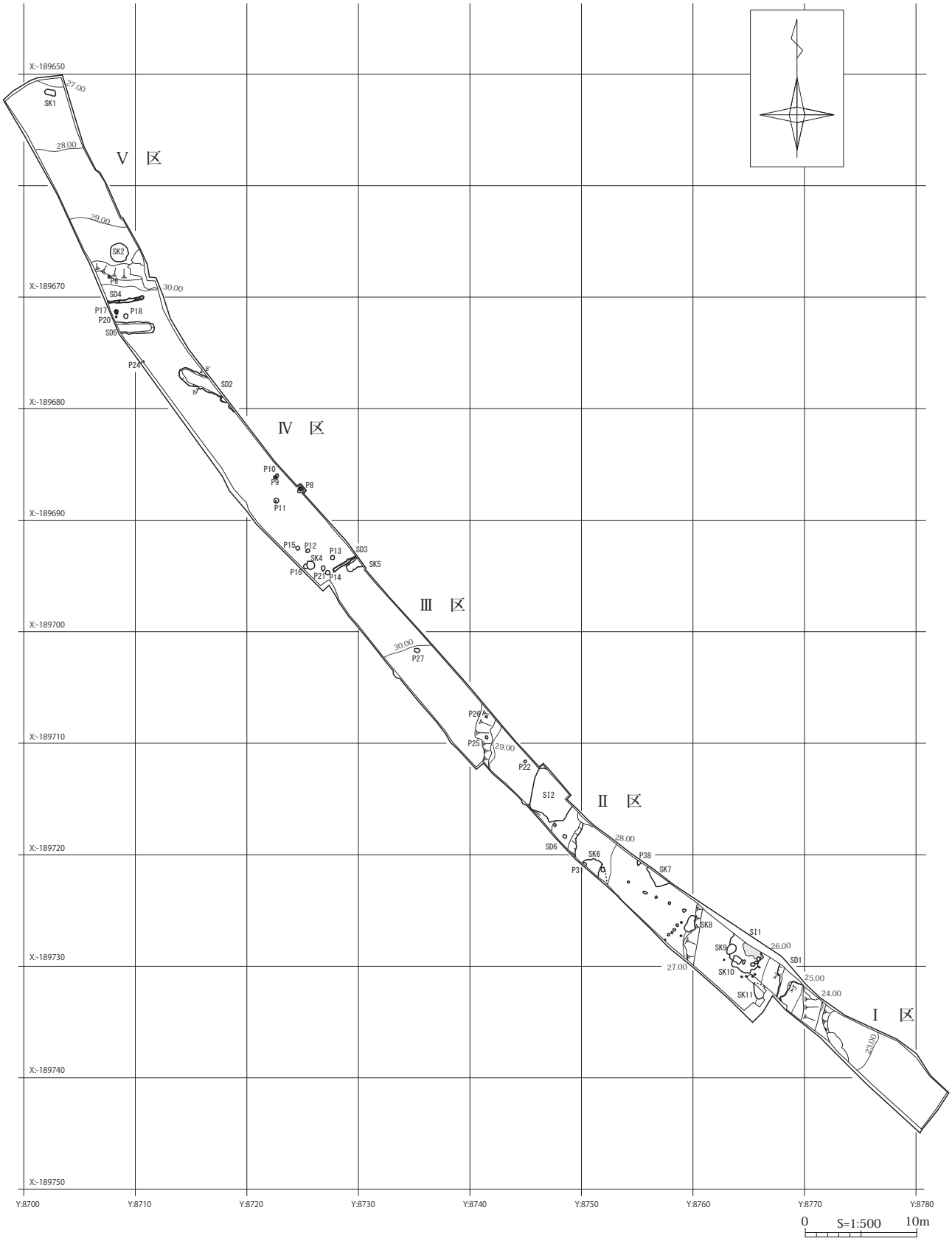


第６図　II・III・IV区　西壁土層断面図

0　S=1:60　1m



第７図　Ⅳ・Ⅴ区　西壁土層断面図


X:-189650
X:-189670
X:-189680
X:-189690
X:-189700
X:-189710
X:-189720
X:-189730
X:-189740
X:-189750
Y:8700
Y:8710
Y:8720
Y:8730
Y:8740
Y:8750
Y:8760
Y:8770
Y:8780
V 区
IV 区
III 区
II 区
I 区
SK1
SK2
SD4
SD5
SD2
SD3
SK5
SK4
SD6
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SD1
S11
S12
P6
P17
P18
P20
P24
P10
P9
P8
P11
P15
P12
P13
P16
P21
P14
P27
P26
P25
P22
P31
P38
27.00
28.00
29.00
30.00
26.00
25.00
24.00
23.00
0
S=1:500
10m

第８図　遺構配置図

第３章　検出遺構と出土遺物

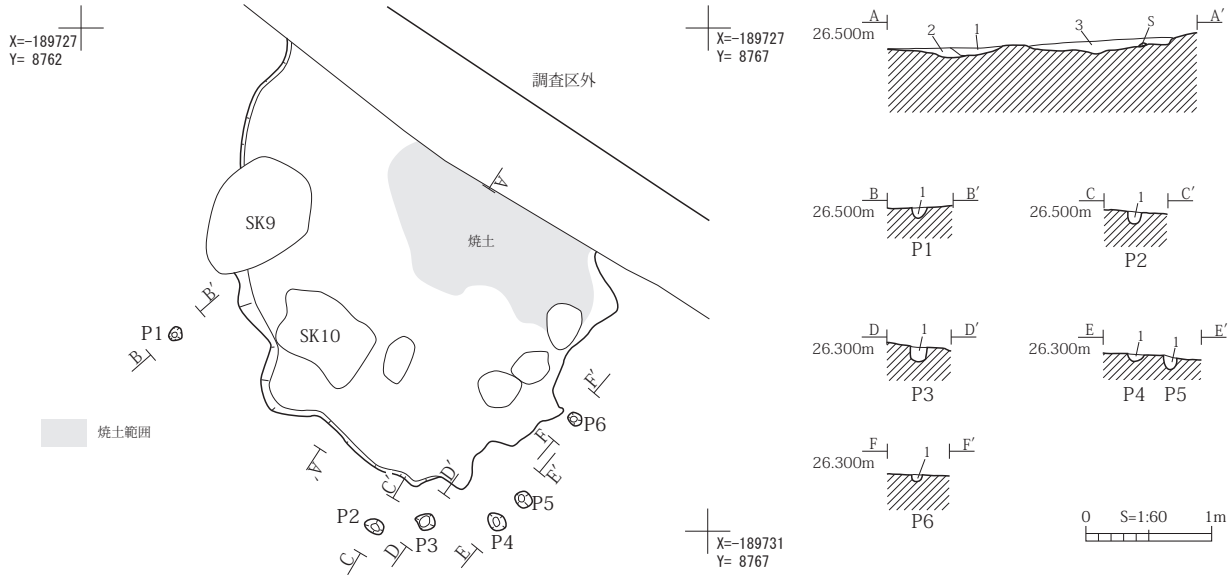
今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡２軒、溝跡６条、土坑 10 基、ピット 38 基である。時期は縄文時代前期と平安時代である。出土遺物は、縄文土器と土師器、須恵器、瓦、石器、金属製品などである。

（１）　竪穴住居跡

SI1 竪穴住居跡

【位置・重複】Ⅱ区の南東側に位置する。全面的に後世の削平を受けており、残存状況がよくない。重複する SK9 と SK10 より古い。

【平面形・規模】北側が調査区外に及んでいるが、検出された状況から平面形は楕円形であると考えられる。検出し

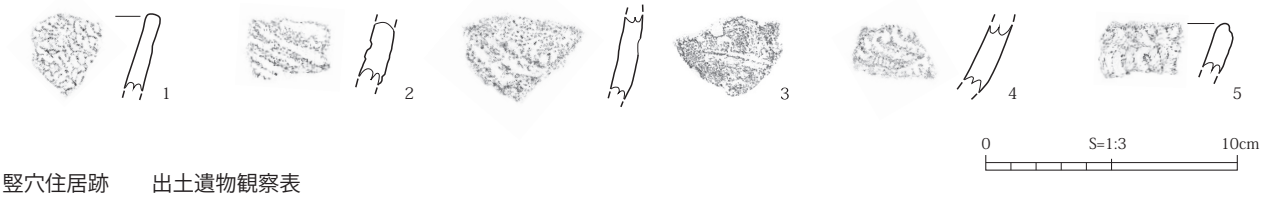


SI1竪穴住居跡堆積土　土層注記表

	土色	土質	混入物・備考
1	2.5YR3/3　暗赤褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒，炭化物粒を極少量含む。黒褐色粘土質シルトを斑に含む。
2	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	7.5YR2/2粘土質シルトを斑に含む。焼土を極少量含む。
3	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を多く含む。

SI1竪穴住居跡柱穴　土層注記表

遺構名	層位	土色	土質	混入物・備考
P1	1	10YR3/4　暗褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土粒を少量含む。炭化物粒を極少量含む。
P2	1	10YR3/3　暗褐色	粘土	凝灰岩粒を少量含む。焼土を極少量含む。
P3	1	10YR2/3　黒褐色	粘土	暗褐色粘土粒と凝灰岩粒を少量含む。焼土を極少量含む。
P4	1	10YR2/3　黒褐色	粘土	凝灰岩粒をやや多く含む。
P5	1	10YR2/2　黒褐色	粘土	凝灰岩粒をやや多く含む。
P6	1	10YR4/4　褐色	粘土	凝灰岩粒を極少量含む。



SI1竪穴住居跡　　出土遺物観察表

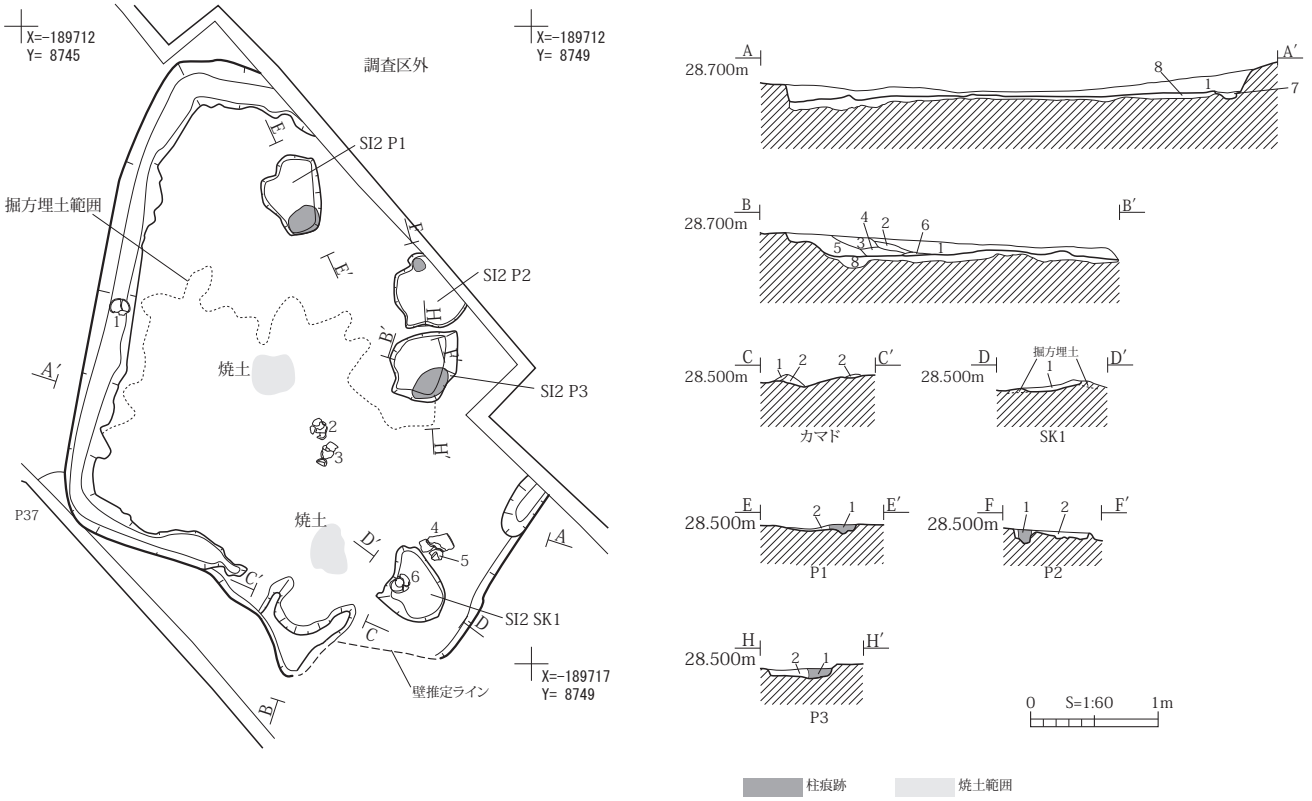
No.	登録番号	出土層位	種別	器種	部位	法量（cm） 口径	底径	器高	文様・調整	特徴・備考	写真図版
1	Ａ－１	堆積土	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(4.0)	ループ文	波状口縁　繊維土器	4－1
2	Ａ－２	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(4.8)	沈線？	繊維土器	4－2
3	Ａ－３	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(4.1)	【外面】縄文(原体不明)　【内面】沈線	繊維土器	4－3
4	Ａ－４	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(2.1)	ループ文	繊維土器	4－4
5	Ａ－５	焼土堆積土	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(2.0)	【外面】ループ文（ＲＬ）　【内面】ミガキ	繊維土器	4－5

第９図　SI1 竪穴住居跡　平面図・断面図・出土遺物

た規模は、東西が 305㎝、南北 357㎝以上である。
【堆積土】3 層に分層した。1 層は炭化物粒と凝灰岩粒を含む焼土層である。2 層は焼土粒を含む黒褐色粘土質シルトである。3 層は凝灰岩粒を多く含む褐色粘土質シルトで住居の堆積土である。
【床・壁】残存する壁高は 5㎝である。南西壁の周辺が高くなっている。床面は焼土分布範囲付近で高くなっている。
【柱穴】住居跡の外周で、径 9 ～ 15㎝のピットを連続して検出した (P1 ～ 6) 深さは 5 ～ 11㎝である。壁外柱穴である可能性が考えられる。
【その他の施設】住居跡の中央部で焼土分布範囲を検出した。平面形は不整形で、規模は東西 168㎝以上、南北 152㎝以上、深さが 7㎝である。地床炉である可能性が考えられる。
【出土遺物】竪穴住居跡の堆積土と焼土の堆積土中から縄文土器が出土している。全て深鉢の破片で、5 点を図化した。A-1(第 9 図 -1) は口縁部が外傾するもので、波状口縁である。胎土中には繊維と石英粒が含まれている。口縁部周縁の地文はループ文である。A-2(第 9 図 -2) は胴部の破片で、胎土中には繊維が含まれている。磨滅しており、施文は沈線と考えられる。A-3(第 9 図 -3) は胴部の破片で、胎土中には繊維と石英粒が含まれている。磨滅しており、地文の原体は不明である。内面に浅い沈線が 2 条施されている。A-4(第 9 図 -4) は胴部の破片で、胎土中には繊維が含まれている。地文はループ文である。A-5(第 9 図 -5) は口縁部の破片である。胎土中には繊維と石英粒が含まれている。口縁部周辺の地文は環状のループ文である。

SI2 竪穴住居跡

【位置・重複】Ⅱ区の北西側に位置する。重複する SD6、P37 より新しい。
【平面形・規模】北東隅が調査区外に及んでいるが、平面形は方形で、北側が広くなっている。西壁で 375㎝、南壁で 330㎝である。
【方向】カマドを基準として N-75°-E である。
【堆積土】8 層に分層した。1 層は暗褐色粘土質シルトを主体とする住居内堆積土、2 ～ 6 層はカマド内堆積土、7 層は周溝内堆積土、8 層は住居掘方埋土である。
【床・壁】床はほぼ平坦である。北側では基本層Ⅳ層を、南側では住居掘方埋土を床面としている。壁は西壁で床からやや急角度に立ち上がる。壁高は 18㎝である。
【掘方】住居掘方埋土は住居の南側のみに確認された。底面はやや起伏がみられる。
【カマド】南西壁の中央部に位置する。カマドの燃焼部と両袖を確認した。袖の規模は東袖が長さ 41㎝、幅 10 ～ 24㎝、高さ 6㎝、西袖が長さ 47㎝、幅 8 ～ 21㎝、高さ 6㎝で、袖の残存状況は良くない。袖は壁面に対してハの字状に付設する。燃焼部の規模は奥行き 76㎝、幅 35㎝である。燃焼部の底面は平坦で、奥壁部分で緩やかな角度で 8㎝ほど立ち上がり、煙道部に繋がっていたと考えられる。
【柱穴】床面から柱穴が 3 基検出された。全て柱痕跡を有する。P1 の平面形は不整円形で規模は径 61㎝、深さ 5㎝である。柱痕跡は径 25㎝、深さが 6㎝である。P2 の平面形は不整円形で規模は径 67㎝、深さは 6㎝である。柱痕跡は径 10㎝、深さが 10㎝である。P3 の平面形は不整円形で規模は径 60㎝、深さは 7㎝である。柱痕跡は径 35㎝、深さが 9㎝である。
【周溝】西壁と南壁のカマドより西側、北壁の西側、東壁の一部で検出した。規模は幅が 15 ～ 26㎝、深さが 6㎝で断面形状は U 字状である。
【その他の施設】床面で土坑を 1 基（SK1）確認した。平面形は不整円形である。規模は長軸が 59㎝、短軸が 44㎝、深さが 4㎝である。堆積土は 1 層で暗褐色粘土である。カマドの東側の位置で検出しており、貯蔵穴と考えられる。
【出土遺物】竪穴住居跡の床面と堆積土、カマド内堆積土、SK1 堆積土内からロクロ土師器と赤焼土器、須恵器、平瓦が出土している。このうちロクロ土師器 5 点、赤焼土器 2 点、須恵器 4 点、平瓦 3 点を図化した。外面に黒色の付着物があるロクロ土師器坏 D-3 を写真図版に掲載した。竪穴住居跡の床面で出土した遺物は D-4(第 11 図 1) のロクロ土師器坏と G-1(第 12 図 1) の平瓦である。ロクロ土師器は全て坏で、ロクロ調整後に内面が横方向のヘラミ



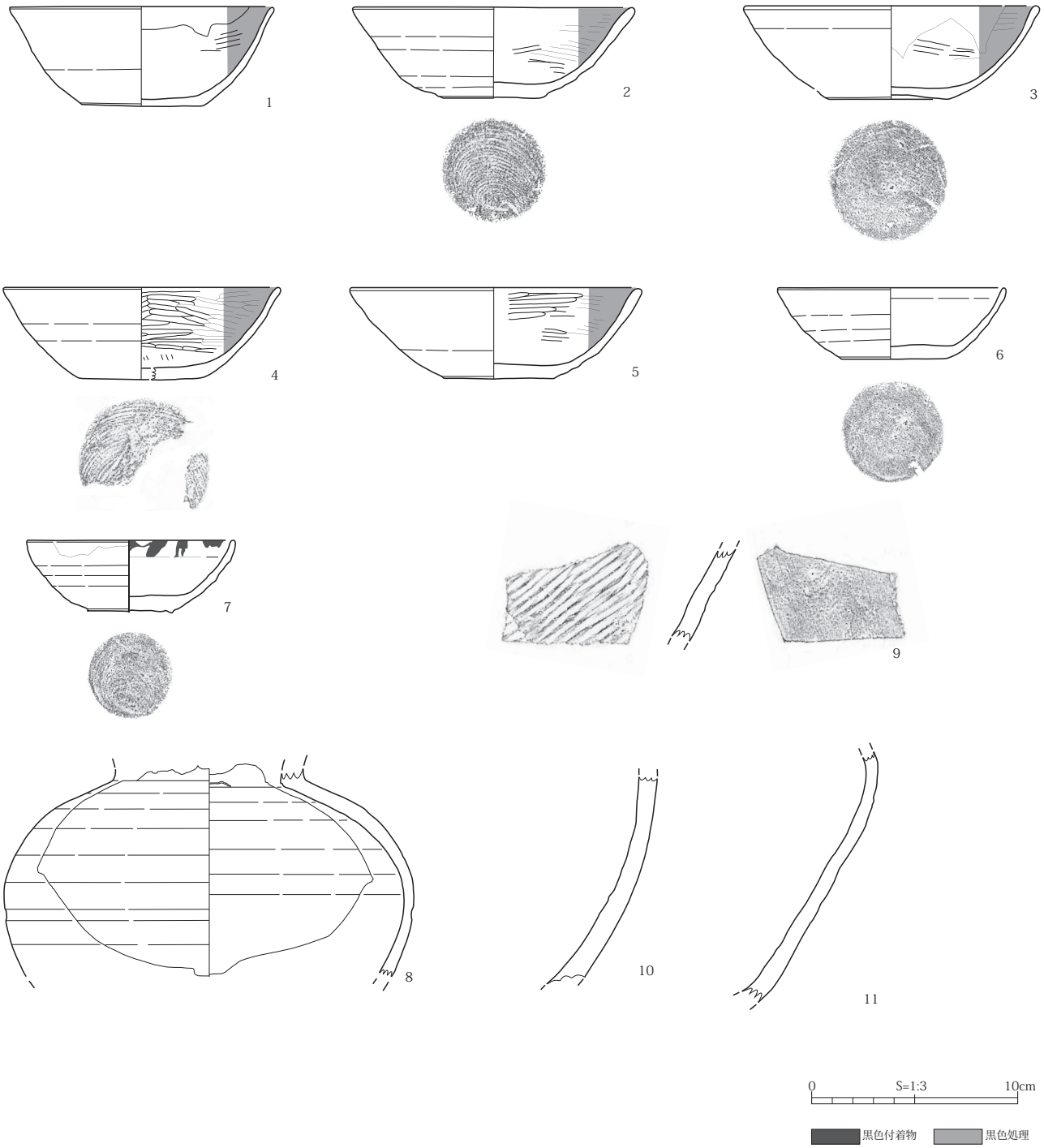
SI2 竪穴住居跡　土層注記表

	土色		土質	混入物・備考
1	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を多く含む。凝灰岩ブロックと炭化物粒を少量含む。【住居堆積土】
2	10YR3/4	暗褐色	粘土	凝灰岩ブロック、凝灰岩粒をやや多く含む。炭化物粒、焼土を少量含む。
3	10YR2/2	黒褐色	粘土	焼土ブロック、焼土粒を多く含む。凝灰岩粒、炭化物粒を少量含む。【カマド内堆積土】
4	10YR2/3	黒褐色	粘土	炭化物粒をやや多く含む。焼土粒を少量含む。【カマド内堆積土】
5	10YR3/3	暗褐色	粘土	凝灰岩粒を多量に含む。凝灰岩ブロック、炭化物粒を少量含む。【カマド内堆積土】
6	10YR1.7/1	黒色	粘土質シルト	炭化物を多量に含む。焼土を少量含む。【カマド機能時堆積】
7	10YR3/3	暗褐色	粘土	凝灰岩粒をやや多く含む。【周溝】
8	10YR6/4	にぶい黄橙色	粘土	暗褐色粘土ブロックをやや多く含む。凝灰岩粒を多量に含む。凝灰岩ブロックを少量含む。【掘方埋土】

SI2 竪穴住居跡　施設土層注記表

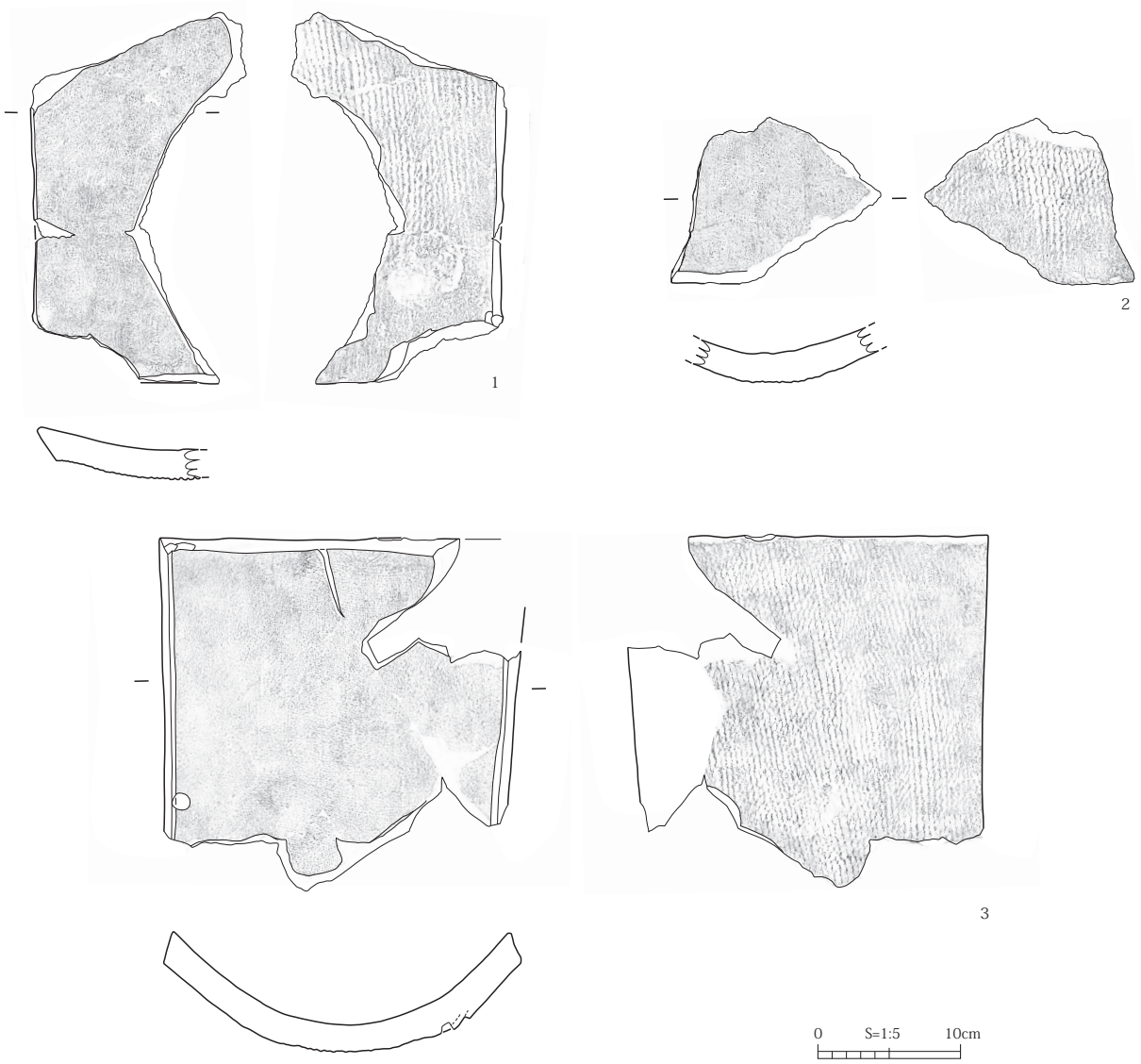
遺構名	層位	土色		土質	混入物・備考
カマド袖	1	10YR4/4	褐色	粘土	【カマド袖構築土】
	2	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土	凝灰岩粒を少量含む。【カマド袖構築土】
SK1	1	10YR3/3	暗褐色	粘土	凝灰岩粒と炭化物をやや多く含む。焼土を少量含む。
P1	1	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を多く含む。凝灰岩小ブロックを少量含む。【柱痕跡】
	2	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	凝灰岩ブロックを多く含む。【柱掘方埋土】
P2	1				【柱痕跡】
	2	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	凝灰岩ブロックを多く含む。【柱掘方埋土】
P3	1	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を少量含む。明黄褐色粘土質シルトを底面に層状に含む。【柱痕跡】
	2	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を多く含む。凝灰岩ブロックを層状に含む。【柱掘方埋土】

第 10 図　SI2 竪穴住居跡　平面図・断面図



No.	登録番号	出土層位	種別	器種	法量（cm）			調整		特徴・備考	写真図版
					口径	底径	器高	外面	内面		
1	D－4	床面	ﾛｸﾛ土師器	坏	(12.8)	4.8	5.9	ロクロ調整	ヘラミガキ→黒色処理	切り離し不明	4－6
2	D－5	カマド内堆積土	ﾛｸﾛ土師器	坏	13.7	4.4	5.0	ロクロ調整	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切、被熱により黒色消去	4－7
3	D－6	カマド内堆積土	ﾛｸﾛ土師器	坏	(14.2)	4.5	5.8	ロクロ調整	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切、被熱により黒色消去	4－8
4	D－7	SK1堆積土	ﾛｸﾛ土師器	坏	13.4	4.5	6.1	ロクロ調整	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切	4－9
5	D－8	周溝	ﾛｸﾛ土師器	坏	14.2	4.4	5.3	ロクロ調整	ヘラミガキ→黒色処理	切り離し不明	4－10
6	D－1	住居内堆積土	赤焼土器	坏	11.1	3.4	5.0	ロクロ調整	ロクロ調整	回転糸切	4－12
7	D－2	住居内堆積土	赤焼土器	坏	10.1	3.5	4.1	ロクロ調整	ロクロ調整	回転糸切、黒色付着物	4－13
8	E－1	住居内堆積土	須恵器	長頸壺	—	—	(10.8)	ロクロ調整	ロクロ調整		4－15
9	E－3	住居内堆積土	須恵器	甕	—	—	(4.5)	平行タタキ目	ヘラナデ		4－14
10	E－2	住居内堆積土	須恵器	甕	—	—	(9.9)	ヘラケズリ	ヘラナデ		4－16
11	E－4	住居内堆積土	須恵器	甕	—	—	(12.1)		ヘラナデ		4－17

第 11 図　SI2 竪穴住居跡出土遺物（1）



№.	登録番号	出土層位	種別	法量（cm）			文様・調整	特徴・備考	写真図版
				長	幅	厚さ			
1	G－1	床面	平瓦	(26.1)	(15.0)	(2.1)	【凸面】縄叩き目　【凹面】布目痕→ナデ		4－19
2	G－2	カマド内堆積土	平瓦	(11.7)	(14.7)	(2.2)	【凸面】縄叩き目　【凹面】布目痕→ナデ		4－20
3	G－3	堆積土	平瓦	(24.8)	25.4	2.4	【凸面】縄叩き目　【凹面】布目痕→ナデ	胎土中に須恵器破片混入	4－18

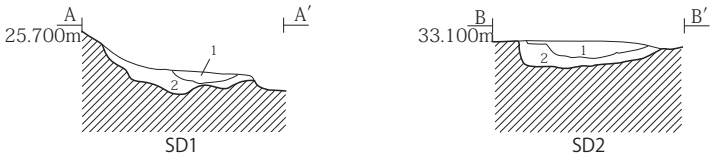
第 12 図　SI2 竪穴住居跡出土遺物（2）

ガキ後に黒色処理されている。D-5(第 11 図 2) と D-6(第 11 図 3) の内面は被熱によって黒色処理が消失している。D-4、5、6、7(第 11 図 1 ～ 4) の底部の切り離しは回転糸切りである。D-4 の器形は体部が内弯して立ち上がり、口縁部が外反している。D-5 の器形は体部が緩やかに内弯して立ち上がり、口縁部は外傾している。D-6 の器形は体部から口縁部が内弯して立ち上がり、口唇部に厚みがある。D-7 の器形は体部が内弯して立ち上がり、口縁部は外傾している。D-8(第 11 図 5) の器形は体部が内弯し、口縁部は外傾している。D-1、2(第 11 図 6・7) は赤焼土器である。赤焼土器は全てロクロ成形で、底部の切り離しは回転糸切である。D-1 の器形は体部が内弯して立ち上がり、口縁部は外傾している。D-2 の器形は体部から口縁部まで内弯して立ち上がっている。E-1 ～ 4(第 11 図 8 ～ 11) は須恵器である。E-1 は長頸壺の体上半部から頸部の破片である。E-2 と E-3、E-4 は甕の体部破片である。E-2 の外面にはヘラケズリ、内面にはヘラナデ、E-3 の外面は平行叩き目、E-4 の底部周辺にヘラケズリ調整が確認される。G-1 ～ 3(第 12 図 1 ～ 3) は平瓦である。G-1 は平瓦の破片である。焼成時に生じた形状の歪みがある。凸面には縦方向の縄叩き目、凹面には織目が細かい布目痕があり、それを切るように斜め方向のナデ調整がある。胎土には砂が含ま

れている。G-2 は平瓦の破片である。凸面には縦方向の縄叩き目、凹面には布目痕があり、縦方向のナデ調整がある。G-3 は平瓦の破片で周縁と両側縁部が残存している。凸面には斜め方向の縄叩き目、凹面には布目痕がある。凸面に須恵器の破片が瓦の中に入り込んでおり、須恵器の破片が瓦の胎土に混入した状態で焼成された瓦である。

（2） 溝跡

溝跡は 6 条が検出された。Ⅱ区では SD1 と SD6 が、Ⅳ区では SD2 と SD3、SD4、SD5 が検出された。このうち SD4 は溝状の遺構ではあるが、畑の耕作痕跡と考えられる。SD1 と SD6 は南北方向に走行し、SD2 と SD4、SD5 は東西方向に走行する。このうち遺物が出土した SD5 と SD6 について詳細を記述する。



SD1 溝跡堆積土　土層注記表

	土色	土質	混入物・備考
1	10YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	褐色粘土ブロック（30～40㎜），凝灰岩ブロック（5～40㎜）をやや多く含む。
2	10YR2/3　黒褐色	粘土	凝灰岩ブロック（5～50㎜）を多く含む。

SD２溝跡堆積土　土層注記表

	土色	土質	混入物・備考
1	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒，凝灰岩ブロック（2～20㎜）を少量含む。
2	10YR4/3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒，凝灰岩ブロック（2～50㎜）多く含む。

第 13 図　SD1・2 溝跡　平面図・断面図

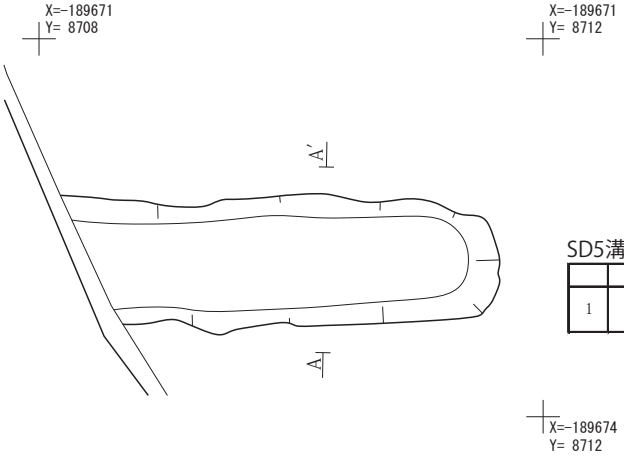
SD5 溝跡

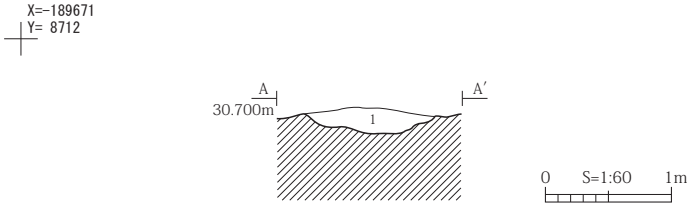
【位置・重複】Ⅳ区の北側に位置する。重複する遺構はない。

【平面形・規模・方向】検出長 335㎝で、西端は調査区外へ延びる。上端幅 110㎝、下端幅 75㎝、深さ 9 ～ 22㎝である。断面形は U 字形である。方向は N-88° -E である。底面には凹凸があり、東から西に向かって低くなる。

【堆積土】堆積土は単層である。暗褐色粘土質シルトで自然堆積である。

【出土遺物】溝の堆積土からロクロ土師器、須恵器、丸瓦、軒平瓦、平瓦、金属製品が出土している。このうち丸瓦 2 点と軒平瓦 2 点、金属製品 1 点を図化した。F-1(第 15 図 1) と F-2(第 15 図 2) は丸瓦の破片である。F-2 の凹面の布目痕の織目は緻密である。G-4(第 15 図 -3) は軒平瓦で、瓦当面の文様はロクロ挽き重弧文である。顎面が剥落した部位には格子叩き目痕がある。凸面は縦方向の丁寧なナデ調整、凹面は布目痕とナデ調整である。G-5(第 15 図 -4) は軒平瓦の破片である。瓦当面がわずかに残存しており、均整唐草文の花の文様の一部が確認できる。凸面は縦方向の縄叩き目、凹面は織目が細かい布目痕である。N-1(第 15 図 -5) は金属製品で釘である。

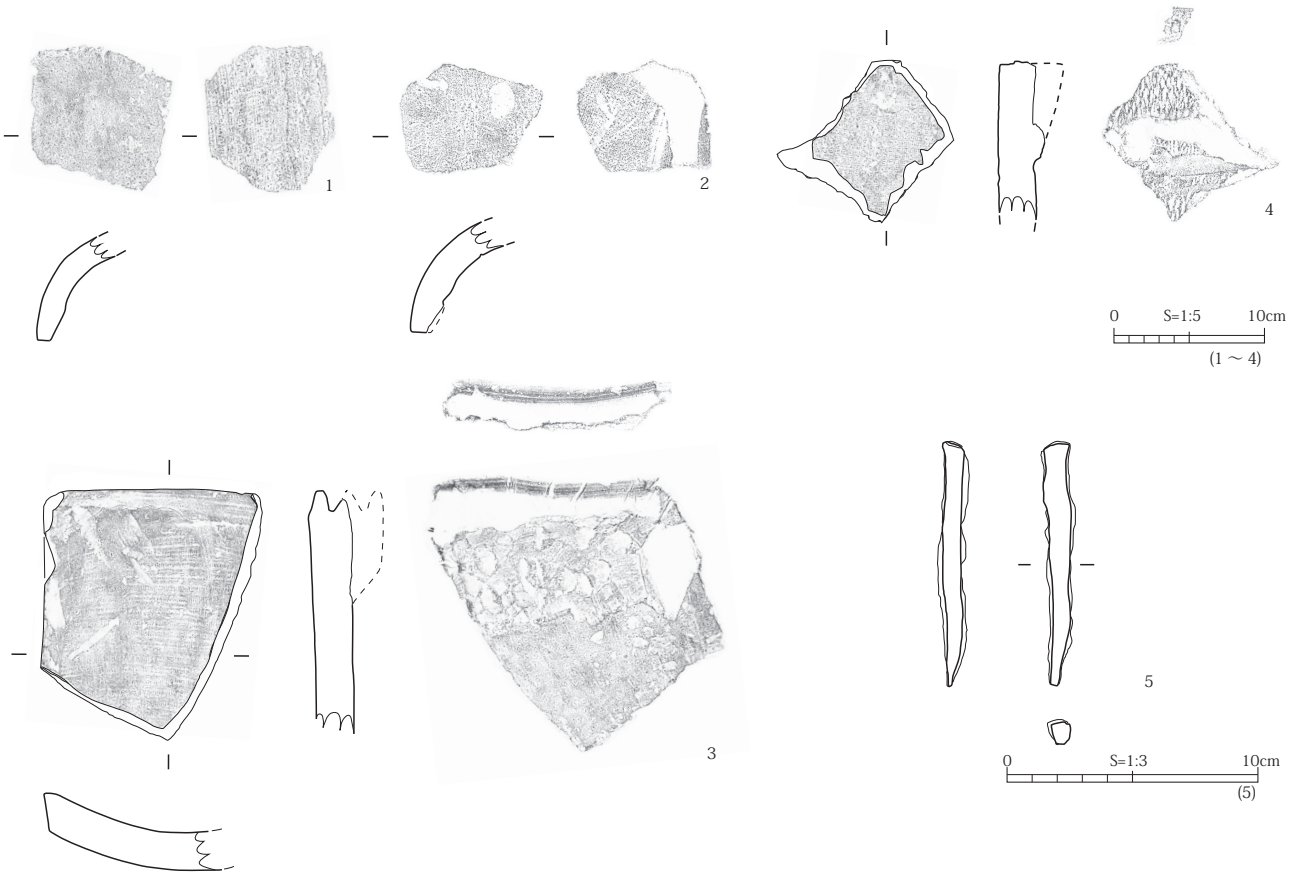




SD5溝跡堆積土　土層注記表

	土色	土質	混入物・備考
1	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒（5～25㎜）をやや多く含む。炭化物粒を微量に含む。

第 14 図　SD5 溝跡　平面図・断面図



No.	登録番号	出土層位	種別	法量（cm）			文様・調整	特徴・備考	写真図版
				長	幅	厚さ			
1	F－1	堆積土	丸瓦	(10.4)	(5.5)	1.6	【凸面】ナデ　【凹面】布目痕		5－1
2	F－2	堆積土	丸瓦	(7.0)	(7.5)	(2.2)	【凸面】ナデ　【凹面】布目痕		5－2
3	G－4	堆積土	軒平瓦	(16.7)	(14.8)	(2.7)	【瓦当面】ロクロ挽き重弧文 【凸面】格子目叩き→ナデ 【凹面】布目痕→ナデ		5－3
4	G－5	堆積土	軒平瓦	(10.8)	(11.8)	(3.4)	【瓦当面】均整唐草文　【凸面】縄叩き目　【凹面】布目痕		5－4
5	N－1	堆積土	金属製品	9.8	1.2	0.9		釘　頭頂部残存	5－5

第 15 図　SD5 溝跡出土遺物

SD6 溝跡

【位置・重複】Ⅱ区の北西側に位置する。重複する SI2 よりも古く、P37 より新しい。

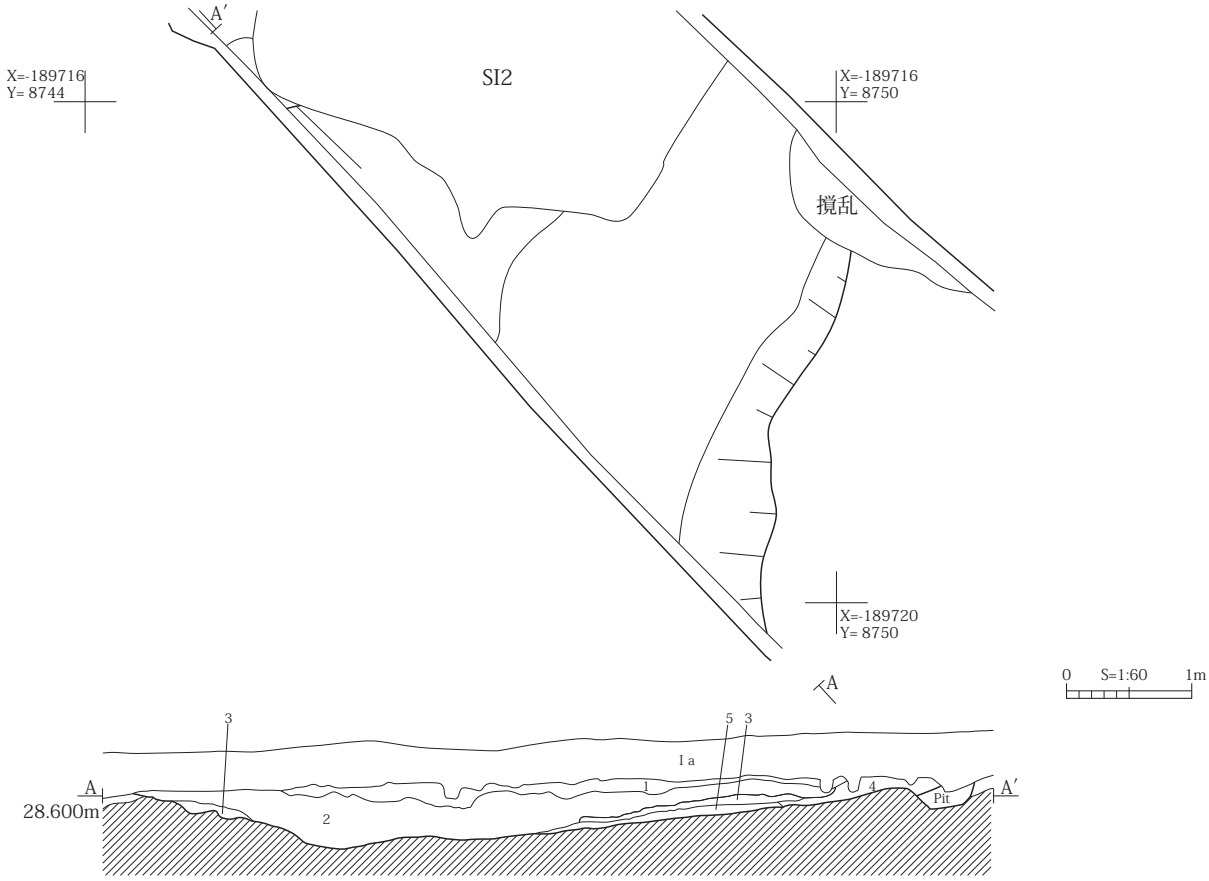
【平面形・規模・方向】検出長は 296㎝で、南北両端は調査区外に延びる。上端幅 483㎝、下端幅 207㎝、深さ 18 ～ 24㎝である。断面形は皿状である。方向は N-13° -E である。底面には凹凸があり、南西から北東に向かって低くなる。

【堆積土】5 層に分層した。1 層は暗褐色シルト、2 ～ 4 層は暗褐色粘土質シルト、5 層は褐色粘土である。

【出土遺物】土師器と平瓦が溝の堆積土中から出土している。このうち平瓦 1 点を図化した。G-6(第 16 図 -1) は平瓦の破片である。凸面は格子叩き目痕、凹面は糸切り痕と布目痕である。

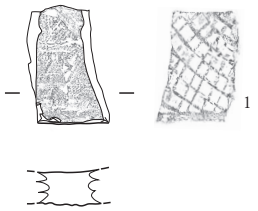
（3） 土坑

土坑は 10 基が検出された。Ⅱ区では SK6 と SK7、SK8、SK9、SK10、SK11、Ⅳ区では SK4 と SK5、Ⅴ区では SK1 と SK2 を検出した。SK3 は攪乱だったため欠番とした。SK1 は規模が長軸 98㎝、短軸 45㎝、深さが 5㎝あり、堆積土に焼土が少量含まれている。SK2 は、規模が長軸 165㎝、短軸 157㎝、深さ 96㎝あり、壁は底面から垂直に立ち上がり、検出面に向かって緩やかな角度で立ち上がる。このうち遺物が出土した SK6 と SK8、SK9、SK10 について詳細を記述する。



SD6溝跡堆積土　土層注記表

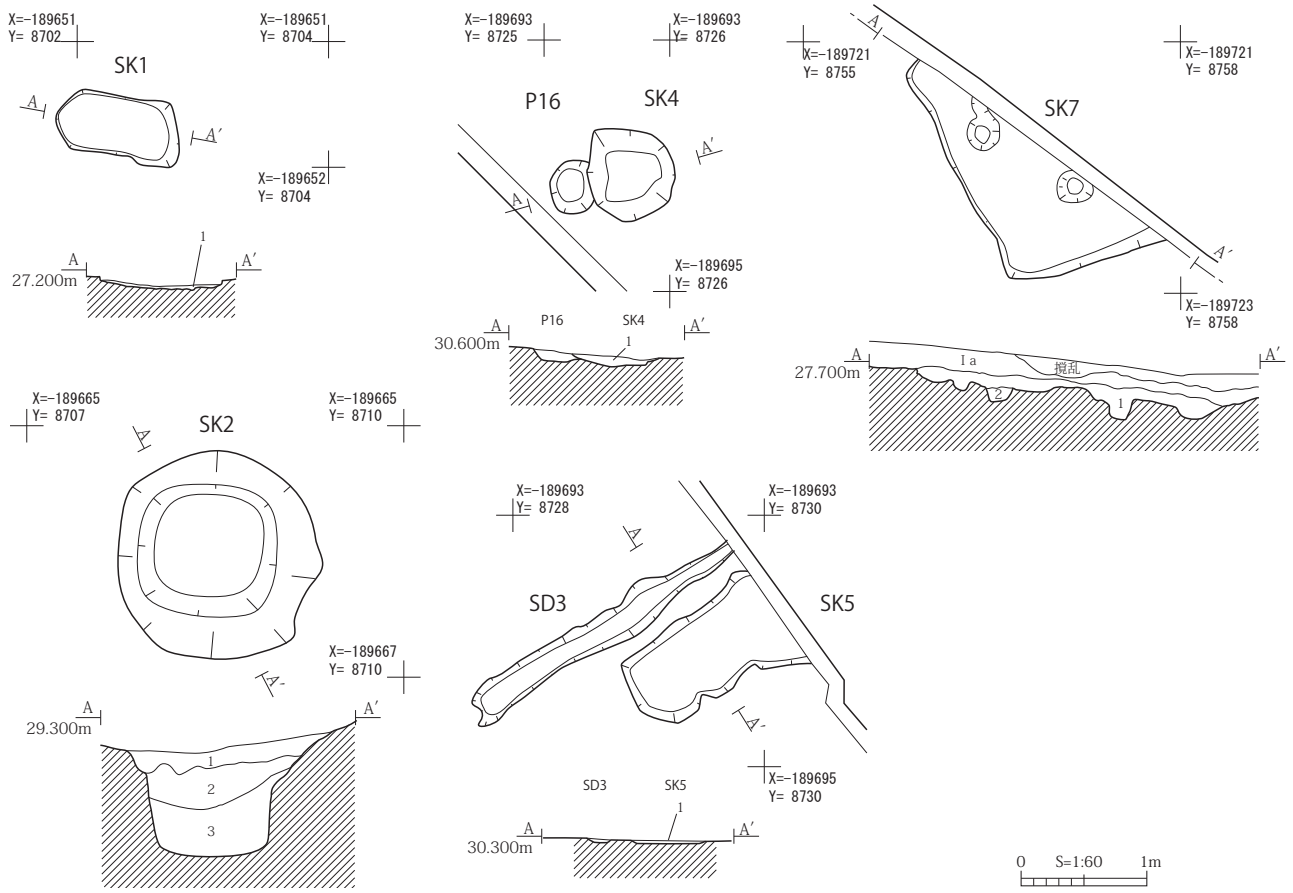
	土色		土質	混入物・備考
1	10YR3/3	暗褐色	シルト	凝灰岩粒を少量含む。炭化物粒を微量に含む。
2	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を非常に多く含む。凝灰岩小ブロックを少量含む。酸化鉄粒を微量に含む。
3	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩ブロックを多く含む。
4	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を多く含む。
5	10YR4/6	褐色	粘土	小礫を多量に含む。



SD6溝跡　出土遺物観察表

No.	登録番号	出土層位	種別	法量（cm）			文様・調整	特徴・備考	写真図版
				長	幅	厚さ			
1	G－6	遺構確認面	平瓦	(7.9)	(5.5)	(2.3)	【凸面】格子叩き目　【凹面】糸切り痕・布目痕		5－6

第 16 図　SD6 溝跡　平面図・断面図・出土遺物



土坑観察表

遺構名	規模(cm) 長軸×短軸	規模(cm) 深さ	平面形	層位	土色		土質	混入物・備考
SK1	98×45	5	楕円形	1	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	焼土を少量含む。
SK2	165×157	96	不整円形	1	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩ブロック（5～20㎜）を少量含む。
				2	10YR3/4	暗褐色	シルト	凝灰岩粒，凝灰岩ブロック（10～30㎜）やや多く含む。
				3	7.5YR3/4	暗褐色	砂質シルト	酸化鉄を多く含む。砂をやや多く含む。
SK4	87×71	10	不整円形	1	10YR2/2	黒褐色	粘土	凝灰岩粒をやや多く含む。
SK5	(121)×(62)	3	楕円形	1	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	凝灰岩小ブロックを多く含む。
SK7	(204)×(131)	24	方形	1	7.5YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒と焼土、凝灰岩粒を少量含む。
				2	7.5YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	焼土小ブロック，凝灰岩粒を少量含む。暗褐色粘土質シルトブロックを含む。

第 17 図　SK1・2・4・5・7 土坑　平面図・断面図

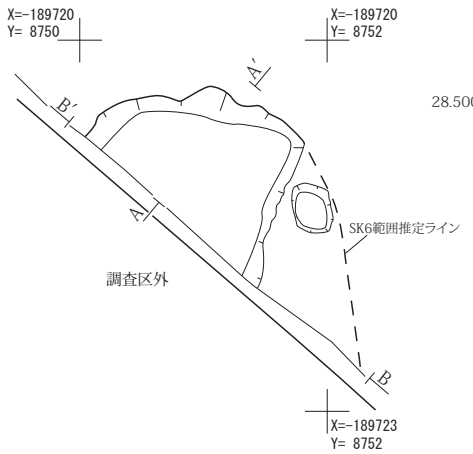
SK6 土坑

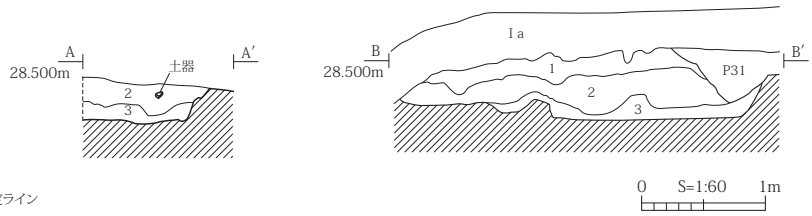
【位置・重複】Ⅱ区の中央部南側に位置する。重複する P31 より古い。

【平面形・規模】南側が調査区外に及んでおり、平面形は楕円形と推定される。検出した規模は長軸 161㎝以上、短軸 158㎝以上、深さ 33㎝である。西壁で土坑の堆積土が確認されており、長軸は 225㎝以上と推定される。断面形は逆台形で、底面には高低差があり、土坑南側では段が付いて 16㎝ほど高くなる。

【堆積土】3 層に分層した。1・2 層は黒褐色粘土、3 層は暗褐色の粘土である。全て自然堆積である。

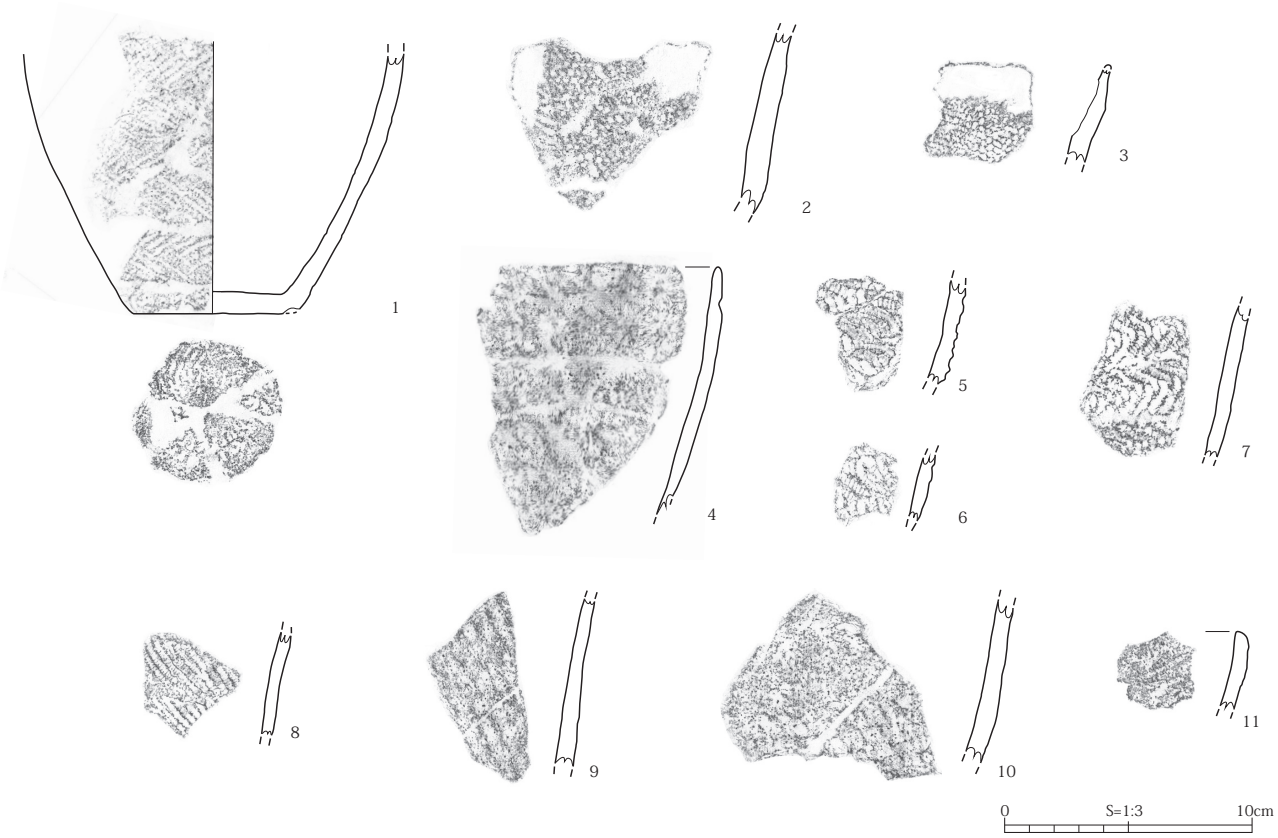
【出土遺物】土坑の堆積土中と底面から縄文土器と石器が出土している。縄文土器は全て深鉢で、このうち縄文土器 17 点、石器 2 点を図化した。A-6(第 18 図 -1) は底部から胴下部まで残存しており、胴部は底部からやや内弯して緩やかに立ち上がる。胎土中には繊維と石英粒が含まれている。磨滅が激しいが、胴部の地文は羽状縄文である。底部には竹管による連続した二列の刺突文がある。A-7(第 18 図 -2) は胴部の破片である。胎土には繊維と石英粒が含まれている。磨滅が激しく、地文は不明であるが、一部にループ文が確認される。A-8 (第 18 図 -3) は口縁部の破片である。胎土には繊維が含まれている。地文は縄文である。A-10(第 18 図 -4) は口縁部から胴部の上部の破片で、





SK6土坑堆積土　土層注記表

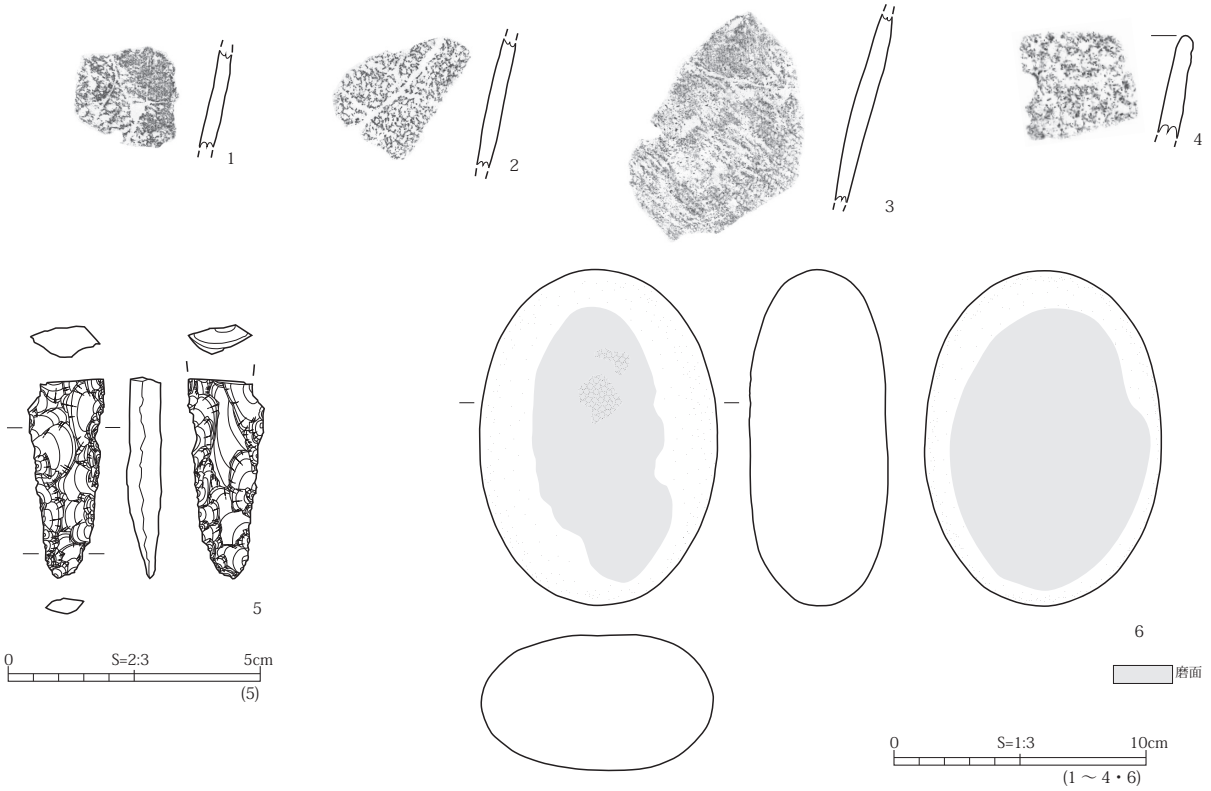
	土色		土質	混入物・備考
1	10YR2/3	黒褐色	粘土	炭化物粒と小礫を少量含む。
2	7.5YR2/3	黒褐色	粘土	凝灰岩粒と小礫を少量含む。炭化物を極少量含む。
3	10YR3/4	暗褐色	粘土	炭化物粒と凝灰岩粒、黄褐色粘土ブロックを少量含む。



SK6土坑　出土遺物観察表

No.	登録番号	出土層位	種別	器種	部位	法量（cm） 口径	底径	器高	文様・調整	特徴・備考	写真図版
1	A－6	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部～底部	—	6.6	(10.5)	【胴部】非結束羽状縄文(ＲＬ+ＬＲ)【底部】刺突文	繊維土器	5－9
2	A－7	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(6.3)	【外面】ループ文　【内面】ミガキ	繊維土器	5－7
3	A－8	堆積土	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(3.8)	縄文(ＬＬＲ)	繊維土器	5－8
4	A－10	堆積土	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(10.0)	縄文(不明)	繊維土器	5－15
5	A－11	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(4.2)	結束羽状縄文	繊維土器	5－10
6	A－12	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(2.7)	ループ文(ＲＬ)	繊維土器	5－11
7	A－13	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(6.1)	【外面】結束羽状縄文　【内面】ミガキ	繊維土器	5－16
8	A－14	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(4.2)	0段多条の縄文	繊維土器	5－12
9	A－15	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(6.8)	縄文(不明)	繊維土器	5－13
10	A－17	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(6.7)	縄文(不明)	繊維土器	5－14
11	A－18	底面	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(3.3)	縄文(ＬＲ、横回転)	波状口縁・繊維土器	5－17

第 18 図　SK6 土坑　平面図・断面図・出土遺物（1）



No.	登録番号	出土層位	種別	器種	部位	法量（cm）			文様・調整	特徴・備考	写真図版
						口径	底径	器高			
1	A－１９	底面	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(3.9)	縄文(不明)	繊維土器	5－18
2	A－２０	底面	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(5.2)	縄文(不明・縦回転)	繊維土器	5－19
3	A－２１	底面	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(7.5)	縄文(ＲＬ)	繊維土器	5－21
4	A－２３	底面	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(4.0)	縄文(不明)	繊維土器	5－20

No.	登録番号	出土層位	種別	器種	法量（cm）			重量(g)	石材	特徴・備考	写真図版
					長	幅	厚				
5	K－２	堆積土	石器	石錐	(4.0)	(1.5)	0.6	3.7	凝灰質頁岩	欠損	5－22
6	K－３	堆積土	礫石器	磨石	13.3	9.4	5.7	1,050	砂岩	敲打痕2ヶ所あり	5－23

第 19 図　SK6 土坑出土遺物（2）

口縁部が外傾している。胎土には繊維が含まれている。磨滅が激しいが、地文は縄文である。A-11(第 18 図 -5) は胴部の破片である。胎土には繊維が含まれている。地文は結束羽状縄文である。A-12(第 18 図 -6) は胴部の破片である。胎土には繊維が含まれている。磨滅しているが、地文はループ文である。A-13(第 18 図 -7) は胴部の破片である。胎土には繊維と石英粒が含まれている。地文は結束羽状縄文である。A-14(第 18 図 -8) は胴部の破片である。胎土には繊維が含まれている。地文は斜行縄文で、0 段多条の原体を使用している。A-15(第 18 図 -9) と A-17(第 18 図 -10) は胴部の破片である。磨滅が激しいが、地文は縄文である。A-18(第 18 図 -11) は口縁部の破片で、波状縁で口縁部が外傾している。胎土には繊維が含まれている。地文は横回転の縄文である。A-20 (第 19 図 -2) は胴部の破片である。胎土には繊維と石英粒が含まれている。磨滅が激しく、地文は縦回転の縄文である。A-21(第 19 図 -3) は胴部の破片である。胎土には繊維が含まれている。地文は縄文である。A-23(第 19 図 -4) は口縁部の破片である。胎土には繊維が含まれている。磨滅しているが、地文は縄文である。K-2 (第 19 図 -5) は折れていて全体形状は不明であるが、棒状の石錐と考えられる。錐部は細かな二次加工が施されて作り出されている。K-3(第 19 図 -6) は磨石である。楕円形の河原石を素材としており、表面と裏面に磨痕が、表面に敲打痕が確認された。

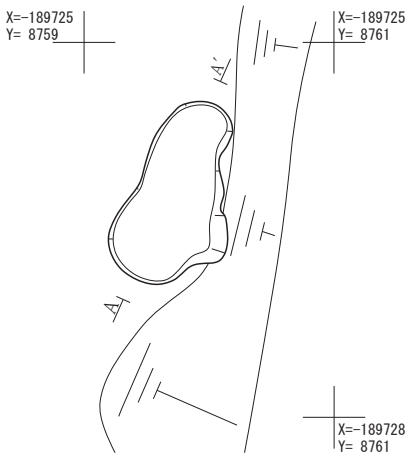
SK8 土坑

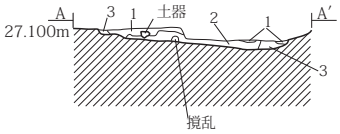
【位置・重複】Ⅱ区の中央に位置する。重複する遺構はない。

【平面形・規模】平面形は不整な長楕円形である。検出した規模は長軸 153㎝、短軸 86㎝、深さ 12㎝である。断面形は浅い皿状で、底面はほぼ平坦である。

【堆積土】3 層に分層した。1 層は黒褐色粘土質シルト、2 層は暗褐色粘土質シルト、3 層は黄褐色粘土質シルトである。

【出土遺物】土坑の堆積土中から縄文土器と石器が出土している。出土した縄文土器は全て深鉢で、このうち 6 点を図化した。A-24(第 20 図 -1) は胴部の破片である。胎土には繊維が含まれている。地文はループ文である。A-25 (第 20 図 -2) は胴部の破片である。胎土には繊維と石英粒が含まれている。磨滅がされているが、地文は複節縄文である。A-26 ～ 28 (第 20 図 -3 ～ 5) は胴部の破片である。胎土には繊維が含まれている。地文は結束縄文である。A-26 と A-28 は同一個体の可能性がある。A-29 (第 20 図 -6) は胴部の破片である。胎土には繊維が含まれている。地文は縄文で、0 段多条の原体を使用している。

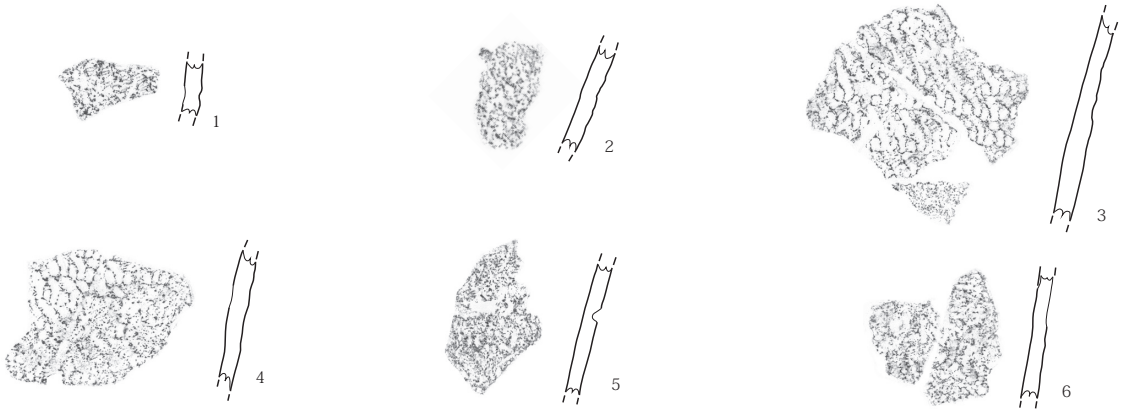




0 S=1:60 1m

SK8土坑堆積土　土層注記表

	土色		土質	混入物・備考
1	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒をやや多く含む。
2	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒をやや多く含む。
3	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を少量含む。



0 S=1:3 10cm

SK8土坑　出土遺物観察表

No.	登録番号	出土層位	種別	器種	部位	法量（cm）			文様・調整	特徴・備考	写真図版
						口径	底径	器高			
1	A－24	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(2.2)	ループ文（RL）	繊維土器	5－24
2	A－25	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(4.3)	縄文(RLR)	繊維土器	5－25
3	A－26	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(8.2)	結束縄文(11R)	繊維土器、A－28と同一個体か	5－26
4	A－27	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(5.7)	結束縄文	繊維土器	5－27
5	A－28	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(5.2)	結束縄文(11R)	繊維土器、A－26と同一個体か	5－28
6	A－29	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(4.9)	0段多条の縄文	繊維土器	5－29

第 20 図　SK8 土坑　平面図・断面図・出土遺物

SK9 土坑

【位置・重複】Ⅱ区の東側に位置する。重複する SI1 より新しい。

【平面・規模】平面形は不整楕円形である。検出した規模は長軸 102㎝、短軸 73㎝、深さ 23㎝である。断面形は U 字状である。

【堆積土】2 層に分層した。1 層は暗褐色粘土質シルト、2 層は褐色粘土である。

【出土遺物】土坑の堆積土中から縄文土器が出土している。全て深鉢で、このうち 5 点を図化した。A-30 (第 22 図 -1) は口縁部の破片で、平縁で口縁部が外傾している。胎土には繊維が含まれており、地文は縄文である。A-31(第 22 図 -2) は胴部の破片である。胎土には繊維と多量の石英粒が含まれている。A-32 (第 22 図 -3) は胴部の破片である。胎土には繊維が含まれており、地文はループ文である。A-33(第 22 図 -4) は胴部の破片である。胎土には繊維が含まれており、地文は縄文である。A-34 (第 22 図 -5) は胴部の破片である。胎土には繊維が含まれており、地文は縄文である。

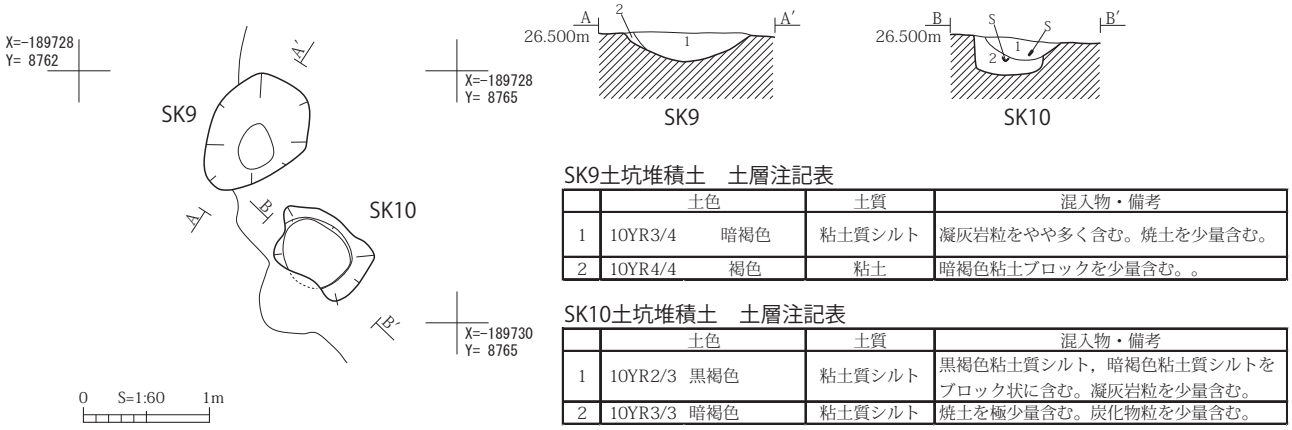
SK10 土坑

【位置・重複】Ⅱ区の東側に位置する。重複する SI1 より新しい。

【平面・規模】平面形は不整円形である。検出した規模は長軸 83㎝、短軸 61㎝、深さ 30㎝である。断面形は北側で壁が垂直に立ち上がる U 字形である。南側では壁が底面から 16㎝程度までは垂直に立ち上がり、段が付いて立ち上がる。土坑の南側では底面が張り出している。

【堆積土】2 層に分層した。1 層は黒褐色粘土質シルト、2 層は暗褐色粘土質シルトである。

【出土遺物】土坑の堆積土中から縄文土器と石器が出土した。このうち縄文土器 6 点と石器 3 点を図化した。A-35(第 23 図 -1) はミニチュア土器の破片である。底部から胴部までわずかに外傾する器形である。胎土には繊維が含まれており、胴部の地文は縄文である。A-36(第 23 図 -2) は口縁部の破片で、胎土には繊維が含まれている。地文はループ文で、内面にはミガキが施されている。A-37 (第 23 図 -3) は深鉢の破片である。胎土には繊維が含まれており、地文は縄文である。A-38(第 23 図 -4) は胴部の破片である。胎土には繊維が含まれており、地文は縄文である。A-39 (第 23 図 -5) は胴部の破片である。胎土には繊維と石英粒が含まれている。地文はループ文である。A-40(第 23 図 -6) は胴部の破片である。胎土には繊維が含まれている。地文は組紐文である。K-4(第 23 図 -7) は石匙である。縦長剥片を素材としており、表面の右側縁には細かな二次加工が施されており、直線的な刃部を作出している。石材は珪質頁岩である。K-6(第 23 図 -8) は平基の石鏃である。側縁は緩やかに外弯しているが、先端部を欠損している。裏面には素材の剥離面が残存している。石材は珪質頁岩である。K-5(第 23 図 -9) は磨石である。扁平な河原石を素材としており、表面と裏面に磨面が確認された。



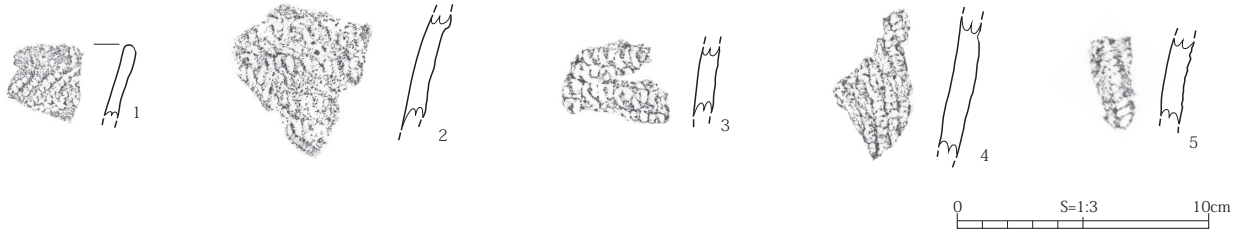
SK9土坑堆積土　土層注記表

	土色	土質	混入物・備考
1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒をやや多く含む。焼土を少量含む。
2	10YR4/4 褐色	粘土	暗褐色粘土ブロックを少量含む。。

SK10土坑堆積土　土層注記表

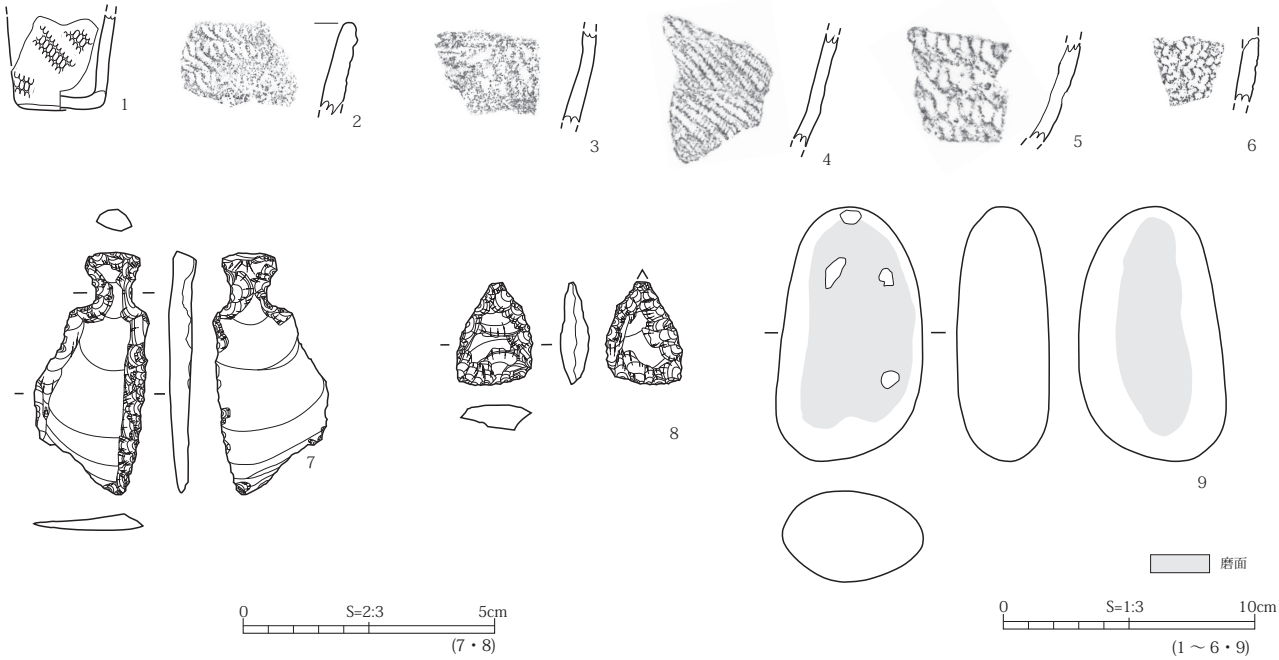
	土色	土質	混入物・備考
1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土質シルト，暗褐色粘土質シルトをブロック状に含む。凝灰岩粒を少量含む。
2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	焼土を極少量含む。炭化物粒を少量含む。

第 21 図　SK9・10 土坑　平面図・断面図



No.	登録番号	出土層位	種別	器種	部位	法量（cm）			文様・調整	特徴・備考	写真図版
						口径	底径	器高			
1	A－３０	堆積土	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(2.9)	縄文（ＬＲ）	繊維土器	5－30
2	A－３１	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(4.6)	ループ文	繊維土器	5－31
3	A－３２	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(3.2)	ループ文	繊維土器	5－32
4	A－３３	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(5.6)	単節縄文(ＬＲ)	繊維土器	5－33
5	A－３４	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(3.5)	単節縄文(ＲＬ)	繊維土器	5－34

第22図　SK9土坑　出土遺物



No.	登録番号	出土層位	種別	器種	部位	法量（cm）			文様・調整	特徴・備考	写真図版
						口径	底径	器高			
1	A－３５	堆積土	縄文土器	ミニチュア土器	底部～胴部	—	3.4	(3.8)	単節縄文(ＲＬ・横回転)	繊維土器	6－1
2	A－３６	堆積土	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(3.7)	【外面】ループ文(ＲＬ)　【内面】ミガキ	繊維土器	6－2
3	A－３７	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(3.6)	縄文(原体不明)	繊維土器	
4	A－３８	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(4.6)	縄文(ＲＬ)	繊維土器	6－3
5	A－３９	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(3.9)	ループ文	繊維土器	6－4
6	A－４０	堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(2.6)	組紐文	繊維土器	6－5

No.	登録番号	出土層位	種別	器種	法量（cm）			重量(g)	石材	特徴・備考	写真図版
					長	幅	厚				
7	K－4	堆積土	石器	石匙	4.8	2.3	0.4	3.8	珪質頁岩		6－7
8	K－6	堆積土	石器	石鏃	(2.0)	1.5	0.5		珪質頁岩	欠損	6－6
9	K－5	堆積土	礫石器	磨石	10.1	5.9	3.6	293.6	凝灰岩		6－8

第23図　SK10土坑　出土遺物

(4)　ピット

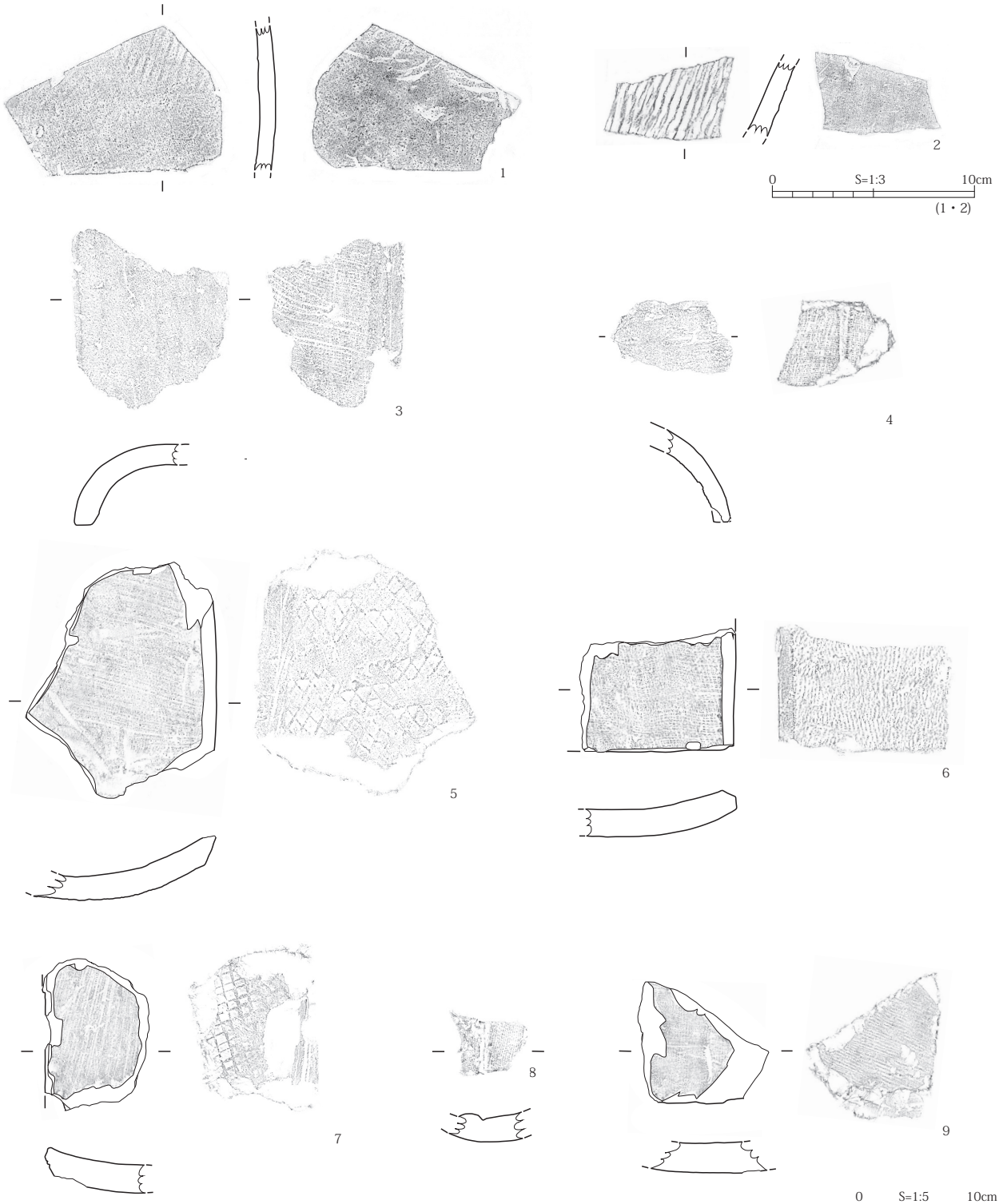
ピットは 38 基 (P1 ～ 4・6・8 ～ 18・20 ～ 22・24 ～ 27・31・37 ～ 50) 検出した。ピットの平面の規模は 13 ～ 57㎝であり、深さは 2 ～ 37㎝で、平面形は不整円形が多い。建物跡や柱列を構成するような規則的な配列は確認されなかった。柱痕跡を有するピットは 4 基 (P8・9・11・17) が確認されており、全てⅣ区から検出された。柱痕跡の径は 12 ～ 36㎝である。

遺構名	調査区	平面形	規模(cm)		層位	土色	土質	混入物・備考	重複
			長軸×短軸	深さ					
Pit 1	Ⅱ区	長楕円形	36×20	21	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	褐色粘土質シルトをブロック状に含む。焼土を少量含む。	SI1より新
					2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	褐色粘土質シルトをブロック状に含む。凝灰岩小ブロックを少量含む。	
Pit 2	Ⅱ区	不整円形	37×29	20	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土質シルト、褐色粘土質シルトをブロック状に含む。焼土を極少量含む。	SI1より新
Pit 3	Ⅱ区	不整円形	25×25	6	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト		SI1より新
Pit 4	Ⅱ区	不整円形	37×28	8	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土質シルトをブロック状に含む。極暗赤褐色粘土質シルト、焼土を少量含む。	SI1より新
					2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土質シルト、凝灰岩小ブロックを極少量含む。	
Pit 6	Ⅴ区	不整円形	26×21	17	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	基本層Ⅲa層土粒をやや多く含む。	
Pit 8	Ⅳ区	不整円形	57×45	4	1	10YR3/4 暗褐色	粘土	凝灰岩粒を少量含む。【柱痕跡】36×28cm	
					2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	凝灰岩粒を多量に含む。	
Pit 9	Ⅳ区	不整円形	36×31	8	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を少量含む。【柱痕跡】21×16cm	Pit10より古い
					2	10YR5/6 黄褐色	粘土	凝灰岩粒を多量に含む。	
Pit 10	Ⅳ区	円形	27×23	3	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	凝灰岩粒を少量含む。	Pit9より新
Pit 11	Ⅳ区	円形	45×41	10	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒、凝灰岩粒を極少量含む。【柱痕跡】12×10cm	
					2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒、凝灰岩ブロックを少量含む。	
Pit 12	Ⅳ区	不整円形	32×29	5	1				
Pit 13	Ⅳ区	隅丸方形	32×32	11	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	基本層Ⅲa層土粒を少量含む。	
Pit 14	Ⅳ区	円形	40×38	4	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩ブロックを多く含む。	
Pit 15	Ⅳ区	不整円形	40×35	2	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	凝灰岩ブロックを多く含む。	
Pit 16	Ⅳ区	不整円形	44×38	9	1	10YR4/4 褐色	粘土	凝灰岩粒、凝灰岩ブロックを少量含む。	
Pit 17	Ⅳ区	不整円形	43×32	20	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	褐色粘土小ブロックを少量含む。【柱痕跡】32×25cm	SK4より古い
					2	10YR4/6 褐色	粘土	暗褐色粘土質シルト小ブロックを少量含む。	
Pit 18	Ⅳ区	不整円形	42×36	17	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	焼土粒、炭化物粒を極少量含む。	
					2	10YR3/4 暗褐色	粘土	炭化物粒を少量含む。。	
					3	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を少量含む。	
Pit 20	Ⅴ区	不整円形	16×15	15	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩ブロックをやや多く含む。	
Pit 21	Ⅳ区	不整円形	47×34	11	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	凝灰岩小ブロックを少量含む。	
Pit 22	Ⅲ区	楕円形	28×23	16	1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	凝灰岩小ブロックを極少量含む。	
Pit 24	Ⅳ区	不明		30	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を多く含む。調査区壁面で確認。	
Pit 25	Ⅲ区	円形	29×22	17	1	10YR7/6 明黄褐色	砂質シルト	暗褐色シルトを少量含む。	
					2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を多く含む。凝灰岩小ブロックを底面に多く含む。	
Pit 26	Ⅲ区	不整円形	20×19	21	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒をやや多く含む。	
Pit 27	Ⅲ区	不整円形	52×38	5	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒をやや多く含む。黄褐色粘土粒を多く含む。	
Pit 31	Ⅱ区	不明		20	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を極少量含む。	SK6より新
Pit 37	Ⅱ区	不明	(32)×(20)	27					SI2より古い
Pit 38	Ⅱ区	楕円形	(38)×35	19	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を多く含む。凝灰岩小ブロックを少量含む。	
Pit 39	Ⅱ区	円形	19×18	3	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト		
Pit 40	Ⅱ区	楕円形	40×19	14	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を極少量含む。	
Pit 41	Ⅱ区	不整円形	23×21	6	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩小ブロックを少量含む。	
Pit 42	Ⅱ区	不整円形	22×21	18	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を極少量含む。	
Pit 43	Ⅱ区	不整円形	31×27	28	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を少量含む。	
Pit 44	Ⅱ区	円形	17×15	16	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を極少量含む。	
Pit 45	Ⅱ区	円形	25×21	30	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒、凝灰岩小ブロックを少量含む。	
Pit 46	Ⅱ区	不整円形	26×21	17	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を少量含む。	
Pit 47	Ⅱ区	不整円形	27×19	24	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト		
Pit 48	Ⅱ区	不整円形	23×19	37	1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト		
Pit 49	Ⅱ区	円形	(14)×13	11	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒をやや多く含む。	
Pit 50	Ⅱ区	不整円形	17×14	13	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト		

表 2　ピット観察表

(5) 遺構外出土遺物

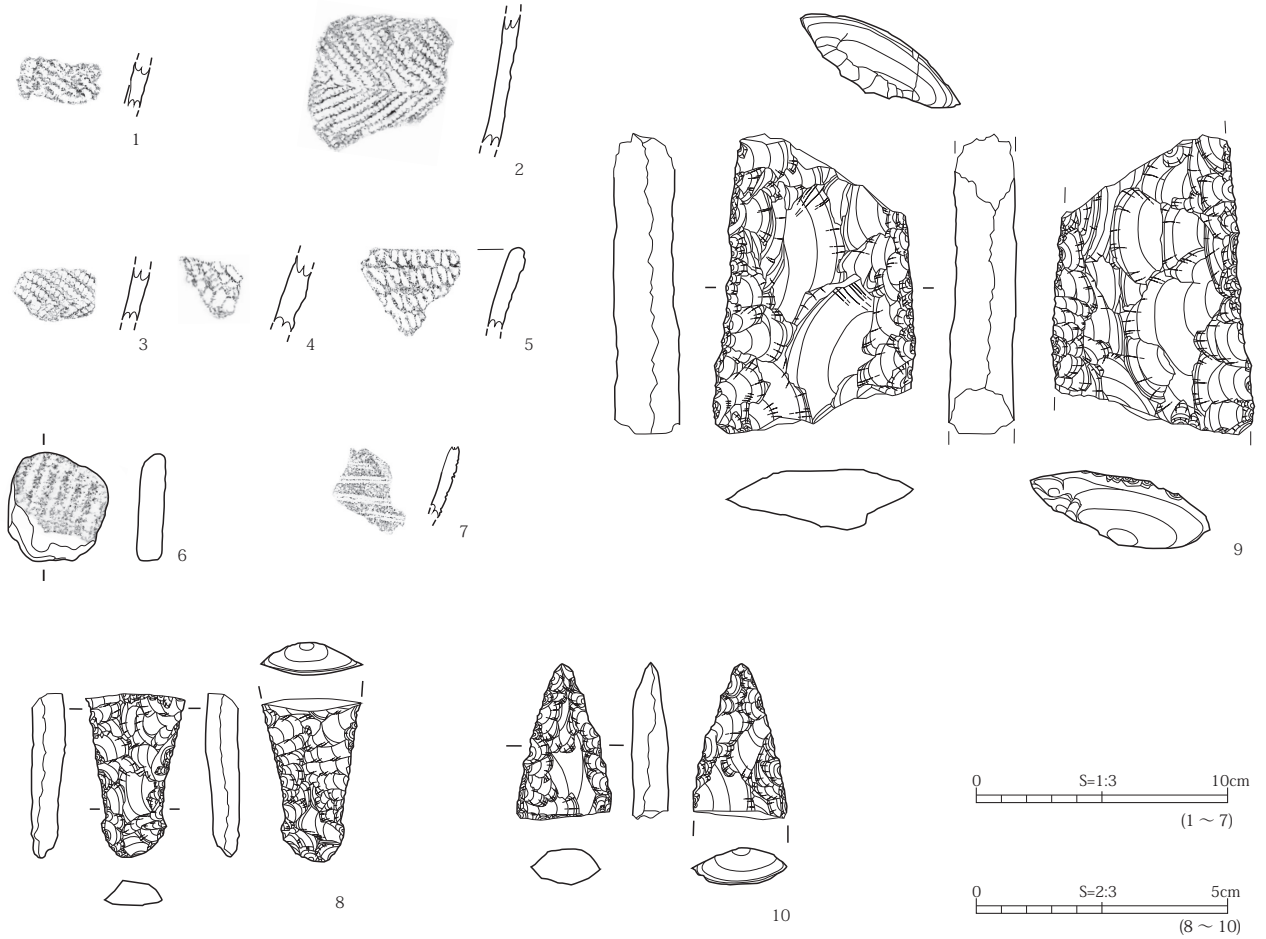
今回の調査では表土や攪乱から多くの遺物が出土している。図化したのは須恵器 2 点、丸瓦 2 点、平瓦 5 点、縄文土器 6 点、土製円盤 1 点、弥生土器 1 点、石器 3 点である。F-3（第 24 図 -3）の丸瓦の凸面はヘラナデ調整、凹面には糸切り痕跡と布目痕がある。布目痕は細かい織目である。F-4 (第 24 図 -4) は有段丸瓦の玉縁部分である。凸面はヘラナデ調整、凹面は布目痕は細かい織目である。G-10(第 24 図 -7) の平瓦の凸面は斜め方向の格子叩き後にナデ調整が施されている。凹面は縦方向のナデ調整が施されている。G-12(第 24-10) の平瓦の凸面には斜め方向のヘラ叩きが施されている。凸面は粘土切り離しの糸切り痕跡がある。K-7 ～ 9 (第 25 図 -8 ～ 10) は尖頭器である。K-7(第 25 図 -8) は基部のみが残存しており、基端部には丸みを帯びた突出部が作出されている。表面、裏面とも二次加工が入念に施されている。K-8(第 25 図 -9) は尖頭器と考えられるが、先端部と基部を欠損しており、全体の形状は不明である。二次加工が全面的に施されている。K-9(第 25 図 -10) は先端部のみが残存している尖頭器である。



No.	登録番号	出土地区・出土遺構	種別	器種	法量（cm）			調整		特徴・備考	写真図版
					口径	底径	器高	外面	内面		
1	E－5	表土	須恵器	甕	－	－	(7.2)	平行タタキ目→ナデ	青海波→ヘラナデ	自然釉	6－9
2	E－6	表土	須恵器	甕	－	－	(3.5)	平行タタキ目	ヘラナデ		6－10

No.	登録番号	出土地区・出土遺構	種別	法量（cm）			文様・調整	特徴・備考	写真図版
				長	幅	厚さ			
3	F－3	Ⅰ区 攪乱	丸瓦	(15.7)	(9.7)	(2.0)	【凸面】ナデ　【凹面】糸切り痕・布目痕		6－11
4	F－4	Ⅴ区 攪乱	丸瓦	(7.1)	(9.8)	(1.6)	【凸面】ナデ　【凹面】布目痕	有段丸瓦、自然釉	6－12
5	G－7	Ⅴ区 攪乱	平瓦	(19.5)	(15.7)	(2.2)	【凸面】格子叩き目→ナデ　【凹面】布目痕→ナデ		6－13
6	G－8	Ⅴ区 攪乱	平瓦	(10.2)	(12.8)	(2.3)	【凸面】縄叩き目　【凹面】布目痕		6－14
7	G－10	Ⅴ区 攪乱	平瓦	(12.7)	(8.3)	(2.4)	【凸面】格子叩き目　【凹面】布目痕→ナデ　【側縁】ヘラケズリ		6－15
8	G－11	Ⅴ区 攪乱	平瓦	(5.2)	(7.1)	(2.2)	【凸面】ナデ？　【凹面】布目痕	磨滅	
9	G－12	Ⅴ区 攪乱	平瓦	(10.2)	(10.8)	(2.5)	【凸面】平行叩き目　【凹面】布目痕		6－16

第 24 図　遺構外出土遺物（1）



No.	登録番号	出土地区・	種別	器種	部位	法量（cm）			文様・調整	特徴・備考	写真図版
						口径	底径	器高			
1	A－41	Ⅳ区 SD2	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(1.8)	縄文（LR）	繊維土器	6－17
2	A－42	Ⅱ区 Pit 2	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(5.3)	【外面】結束羽状縄文　【内面】ミガキ	繊維土器	6－18
3	A－43	Ⅱ区 Pit 2	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(2.1)	【外面】羽状縄文　【内面】ミガキ	繊維土器	6－19
4	A－44	Ⅱ区 Pit 2	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(3.1)	ループ文	繊維土器	6－20
5	A－45	Ⅱ区 表土	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(3.3)	ループ文	繊維土器	6－21
7	B－1	Ⅰ区 攪乱	弥生土器	鉢？	口縁部	—	—	(2.9)	沈線		6－22

No.	登録番号	出土地区・出土遺構	種別	器種	法量（cm）			重量(g)	石材	特徴・備考	写真図版
					長	幅	厚				
6	P－1	Ⅴ区遺構確認	土製品	土製円盤	4.3	4.0	1.0			縄文(原体不明)、繊維混入	6－23
8	K－7	Ⅳ区 SD2	石器	尖頭器	(3.3)	(2.0)	0.6	3.9	珪質頁岩	先端部欠損	6－24
9	K－8	Ⅱ区 Pit 2	石器	尖頭器	(6.0)	4.0	1.3	35.3	頁岩	先端部・基部欠損	6－25
10	K－9	Ⅱ区 遺構確認	石器	尖頭器	(3.1)	1.9	0.7	4.2	頁岩	基部欠損	6－26

第 25 図　遺構外出土物（2）

第 4 章　まとめ

国道 4 号仙台バイパス拡幅工事に伴う燕沢遺跡第 14 次発掘調査では、縄文時代前期の竪穴住居跡と土坑、9 世紀後半から 10 世紀中頃の竪穴住居跡と溝跡などが検出された。燕沢遺跡内では初めての縄文時代の遺構の確認であった。

第 1 節　縄文時代

(1)SI1 竪穴住居跡

今回の調査ではⅡ区の南斜面上で竪穴住居跡を 1 軒検出した。燕沢遺跡内では第 2 次調査と第 3 次調査で遺構確認面や攪乱から縄文時代前期の土器と石器が出土しているが、本遺跡周辺の七北田川流域では縄文時代の遺構の検出は初めてである。

SI1 竪穴住居跡は、削平を受けているため残存状況が良好ではないが、堆積土の一部と、炉と考えられる焼土範囲、住居跡の外周に壁外柱穴と考えられるピットが確認された。住居跡の平面形は不整円形である。住居跡の堆積土中と焼土中から胎土に繊維が含まれる土器が出土している。出土した土器は小破片のみであるが、文様の特徴と胎土に繊維が混入していることから縄文時代前期前葉の時期に相当すると考えられる。

宮城県内では、仙台市三神峯遺跡 (仙台市教育委員会　1980)、名取市今熊野遺跡 (宮城県教育委員会　1986)、名取市泉遺跡 (名取市教育委員会　1998) で縄文時代前期前葉の竪穴住居跡の検出例がある。これらの遺跡で検出された竪穴住居跡は方形もしくは長方形を基調とし、一辺が 4 m以下の規模が小さいものが多いが、今熊野遺跡と泉遺跡では不整円形の小型の住居も検出されている。住居の構造の面では、一辺に円形状の張り出し部を有したり、壁柱穴を有したり、あるいは地床炉を有するという特徴がある。また、三神峯遺跡で確認された第 3 号住居跡では住居跡の外周に小ピットが連続して確認されており、報告書では住居の壁外柱穴の可能性が指摘されている。

今回の調査で確認された SI1 竪穴住居跡は、3.5 m× 3.0 mの小型の住居で、壁外柱穴を有しており、これまで宮城県内で検出された縄文時代前期前葉の住居跡と共通している点もある。

(2) 出土遺物

【縄文土器】

今回の調査では SI1 竪穴住居跡と SK 6 、SK8、SK9、SK10 土坑から縄文土器が出土している。全て破片資料で、全体の器形がわかる土器はない。口縁部の形態は平口縁と波状口縁のものが確認されている。

図化した土器は 42 点あり、全て胎土中に繊維を含んでいる。地文以外の文様は A-6(第 18 図 -1) の底面にある竹管による連続刺突文と A-3 の内面にある沈線文である。地文の種類はループ文が 12 点 (28.6%) で最も多く、単節縄文、多条縄文、羽状縄文、組紐文がある。撚糸文は確認されなかった。

東北地方南部の土器編年で検討すると、今回出土した土器の地文の特徴から縄文時代前期前葉の「大木 1 式」に相当すると考えられる。当該期の土器群は宮城県内では三神峯遺跡第 2 b 層出土土器、今熊野遺跡第 1 群土器、大崎市東要害貝塚第Ⅰ群土器 (大崎市教育委員会　2008) がある。

【石器】

石器は石鏃、尖頭器、石匙、磨石が出土している。今回の調査では石核や剥片、チップの出土がないことから、燕沢遺跡では製品が遺跡内に持ち込まれた可能性が考えられる。特徴的な石器に K-7(第 25 図 -8) の尖頭器がある。

この石器は両面加工の尖頭器で、基端部には丸みを帯びた突出部が作出されている。この尖頭器と同じ形状の基部を有する尖頭器は、宮城県内では三神峯遺跡 (第 28 図 -3、第 29-1) や今熊野遺跡 (第 112 図 -106)、泉遺跡 (第 68 図 -7)、東要害貝塚 (尖頭器Ⅱ類) で、縄文時代前期前葉の時期の土器群と一緒に出土している。

第２節　古代

(1)SI2 竪穴住居跡

Ⅱ区の北西部で竪穴住居跡を１軒検出した。平面形は方形で、規模は 375㎝× 330㎝、南西壁にカマドがある。SI2 竪穴住居跡からはロクロ土師器と赤焼土器、須恵器、平瓦が出土した。このうちロクロ土師器は全て坏で、床面とカマド堆積土から出土している。内面にはヘラミガキ後に黒色処理が施されており、底部の切り離しは回転糸切である。口唇部が外傾するものと外反するものがある。底径と口径の比は 0.31 ～ 0.37 である。赤焼土器は坏２点が堆積土の上層で出土している。床面とカマド内堆積土から出土したロクロ土師器の特徴から、この竪穴住居跡の時期は平安時代、９世紀後半～ 10 世紀中頃と考えられる。

(2)SD5 溝跡（第８次調査 SD7 溝跡）

Ⅳ区の北部で、ほぼ東西方向の SD5 溝跡を検出した。この溝跡は西側に隣接する第８次調査 (仙台市教育委員会 1995) で確認された SD7 溝跡と同一の溝跡である。SD7 溝跡は「主要な建物群を区画していた」溝と報告されている（以下 SD7 溝跡とする）。

SD7 溝跡の南側では、溝跡と同じ方向の SB2 掘立柱建物跡が検出されており、柱穴の配置と規模から寺院の僧坊跡と推定されている。SD7 溝跡の堆積土からは灰釉陶器や赤焼土器、重弁蓮華文軒丸瓦、平瓦が出土しており、SB2 掘立柱建物跡の抜き取り穴から赤焼土器が、掘方埋土から丸瓦と平瓦が出土している。出土遺物の検討から SD7 溝跡と SB2 掘立柱建物跡は 10 世紀前半代に存在していたと考えられている。また、これまでの調査で瓦が出土していることから、瓦葺きの建物の存在が推定されている。さらに第２次調査で漆紙文書や陶硯が出土していることから、燕沢遺跡内には寺院または役所の機能を持つ古代の重要施設が存在していたと推測されている。

今回の調査では SD7 溝跡の東端が確認されており、SB2 掘立柱建物跡と平行する SD7 溝跡は東側には延びないことが明らかになった。また SI2 竪穴住居跡のほかにピットが多数確認されているが、建物を構成するような柱穴の配置は認められなかった。したがって主要な建物群は今回の調査区より西側の範囲を中心に展開されていたと推測される。また SD7 溝跡と SB2 掘立柱建物跡とほぼ同じ方向の溝跡が第 12 次調査で検出されている (SD1 溝跡)。堆積土中からロクロ土師器や瓦が出土していることから平安時代の溝跡と考えられ、建物群を区画する溝跡の可能性が指摘されている。これらの遺構の検出状況から、施設の中心区域は溝で区画され、その規模は南北約 84 ｍと推定される。

(3) 出土瓦

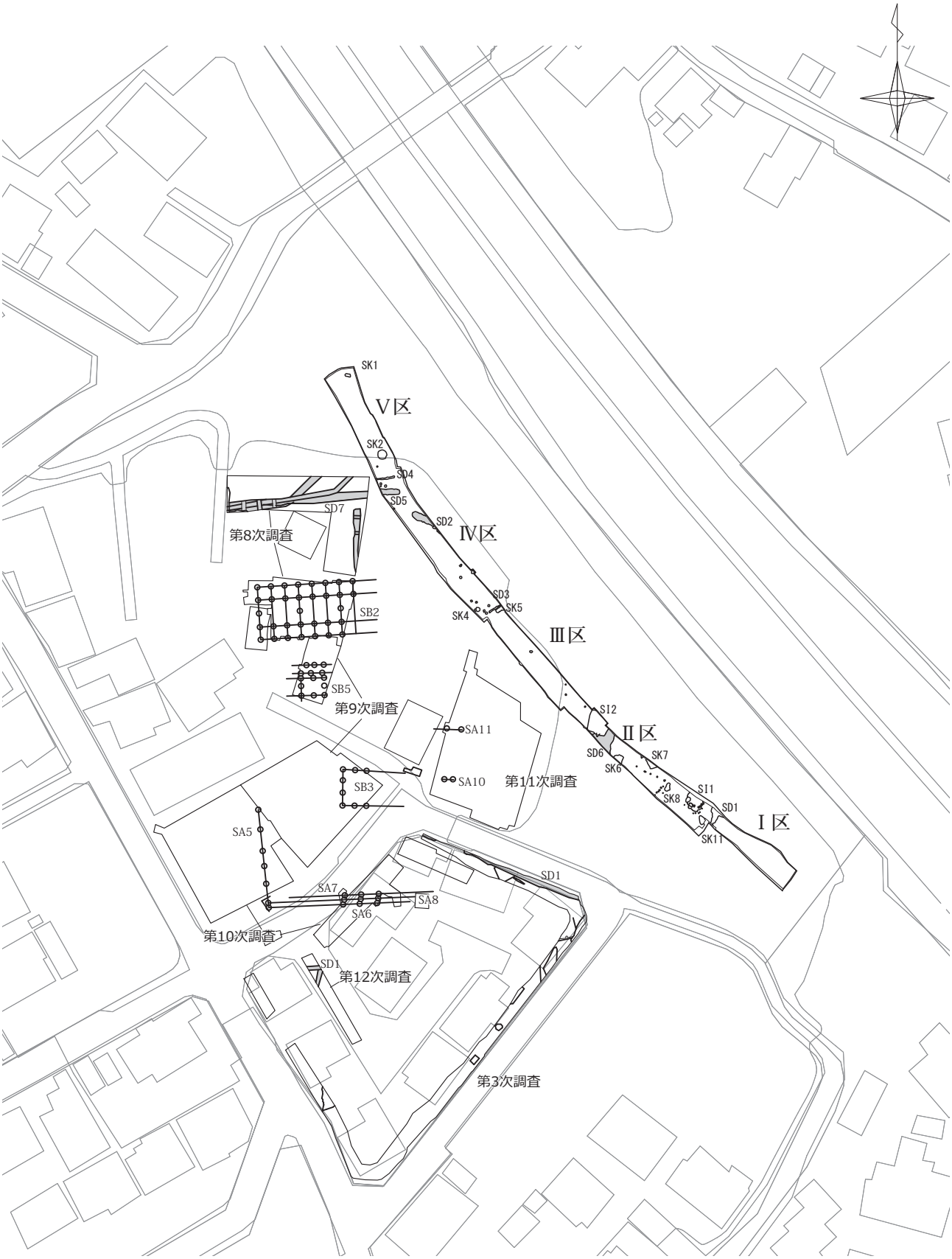
今回の調査で出土した瓦には軒平瓦と丸瓦、平瓦がある。軒平瓦はロクロ挽き重孤文軒平瓦 (G-4) と均整唐草文軒平瓦 (G-5）が出土した。丸瓦は有段丸瓦 (F-4) が出土した。

これまで燕沢遺跡で出土した平瓦は凸面の調整で分類され、時期の検討が行われている。今回の調査で出土した平瓦は凸面の調整で３類に分類され、以下のようにこれまでの分類に相当すると考えられる。

①格子叩き目【G-6、G-7、G-10】……「平瓦１類」
②平行叩き目【G-12】……「平瓦２類」
③縄叩き目　【G-1、G-2、G-3、G-8】……「平瓦４類」

①と②は多賀城創建期以前の時期、③は多賀城Ⅱ，Ⅲ期以降のものと考えられている。

燕沢遺跡では、これまで多賀城創建期以前の瓦が出土しているが、その時期に相当する遺構は検出されていない。今回の調査においても、その時期の瓦は出土したものの、遺構は検出されなかった。また、表採された単弁四弁蓮華文軒丸瓦から、多賀城創建期以前の時期の瓦葺き建物群の存在の可能性が指摘されているが、現時点ではその時期の遺構は確認されていない。多賀城創建期以前の遺構の検出と資料の増加を今後の調査に期待したい。



0 S=1:1000 20m

溝跡

※明朝体は過去の調査で検出した遺構番号
ゴシック体は第14次調査で検出した遺構番号

第 26 図　燕沢遺跡東部遺構配置図

引用・参考文献

伊東信雄　1950「燕澤古瓦出土地」『仙台市史３　別編 1』

大崎市教育委員会　2008『東要害貝塚』宮城県大崎市文化財調査報告書第３集

加藤道男　1983「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』

興野義一　1984「大木式土器について」『宮城の研究 1―考古学編―』

佐川正敏　2015「東北への仏教伝来と寺院造営・瓦生産」『東北の古代史３蝦夷と城柵の時代』

仙台市教育委員会　1980『仙台市富沢三神峯遺跡発掘調査報告書―東北電力送電線鉄塔移設に伴う北東部Ｃ地点緊急発掘調査―』仙台市文化財調査報告書第 25 集

仙台市教育委員会　1982『燕沢遺跡発掘調査報告書』　仙台市文化財調査報告書第 39 集

仙台市教育委員会　1984『燕沢遺跡』仙台市文化財調査報告書第 62 集

仙台市教育委員会　1988『燕沢遺跡』仙台市文化財調査報告書第 116 集

仙台市教育委員会　1991『燕沢遺跡第４・５・６次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 154 集

仙台市教育委員会　1993『大蓮寺窯跡―第２・３次発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告書第 168 集

仙台市教育委員会　1994『仙台平野の遺跡群ＸⅢ－平成５年度発掘調査報告書　燕沢遺跡第７次調査など－』仙台市文化財調査報告書第 179 集

仙台市教育委員会　1995『仙台平野の遺跡群ＸⅣ－平成６年度発掘調査報告書　燕沢遺跡第８次調査など－』仙台市文化財調査報告書第 195 集

仙台市教育委員会　1996『仙台平野の遺跡群ＸＶ－平成７年度発掘調査報告書　燕沢遺跡第９次調査など－』仙台市文化財調査報告書第 211 集

仙台市教育委員会　1997『仙台平野の遺跡群ＸⅥ－平成８年度発掘調査報告書　燕沢遺跡第 10 次調査など－』仙台市文化財調査報告書第 216 集

仙台市教育委員会　1998『仙台平野の遺跡群ＸⅦ－平成９年度発掘調査報告書　燕沢遺跡第 11 次調査－』仙台市文化財調査報告書第 228 集

仙台市教育委員会　2005『郡山遺跡発掘調査報告書―総括編 (1)―』仙台市文化財調査報告書第 283 集

仙台市教育委員会　2006『前田館跡他　発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 301 集

仙台市教育委員会　2009『三神峯遺跡―第６次発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告書第 338 集

仙台市教育委員会　2010a『与兵衛沼窯跡－都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第 366 集

仙台市教育委員会　2010b『仙台平野の遺跡群ＸＸ－平成 21 年度発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第 371 集

名取市教育委員会　1998『宮城県名取市泉遺跡 [宮城県警察学校建設関係発掘調査報告書]』名取市文化財調査報告書第 39 集

早瀬亮介　2009「前期大木式土器の変遷と地域性―編年研究の現状と課題―」『日本考古学協会 2009 年度山形大会研究発表資料集』

宮城県教育委員会　1986『今熊野遺跡Ⅱ　縄文・弥生編』宮城県文化財調査報告書第 114 集

II 区調査区全景 (南東から)

II 区調査区全景 (北西から)

III 区調査区全景 (南東から)

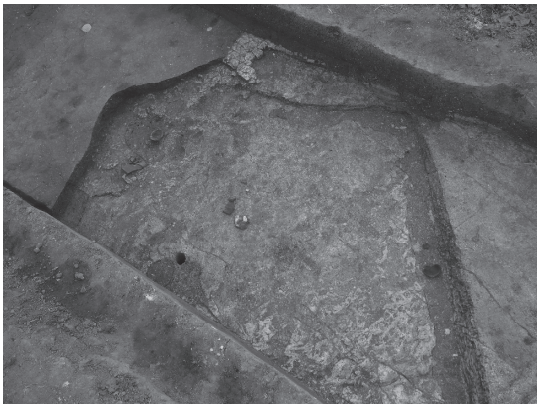
IV 区調査区全景 (北西から)

V 区調査区全景 (北西から)

写真図版 1

SI 1 竪穴住居跡確認状況 (北西から)

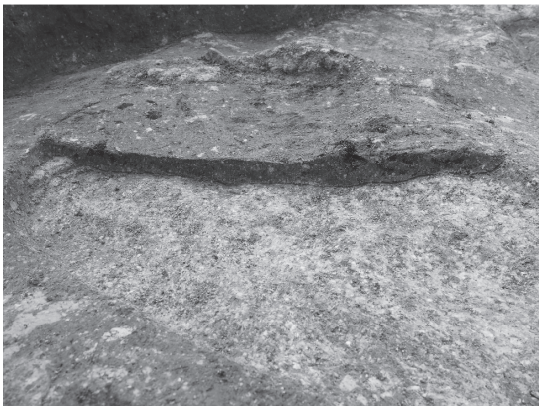
SI 1 竪穴住居跡完堀状況 (北西から)

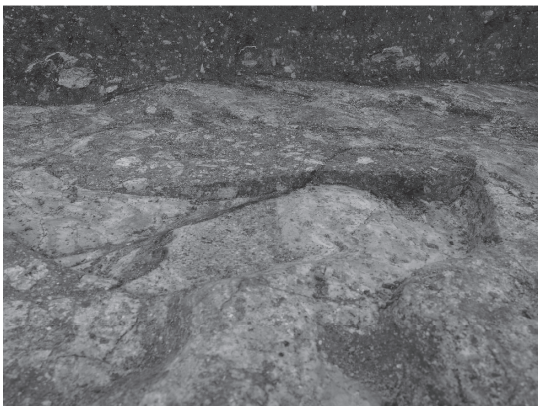

SI 2 竪穴住居跡床面検出状況 (北から)

SI 2 竪穴住居跡床面検出状況 (調査区拡張後 北から)

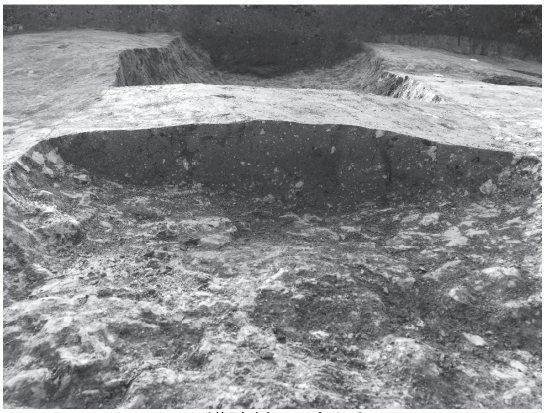
SI 2 竪穴住居跡遺物出土状況 (北から)

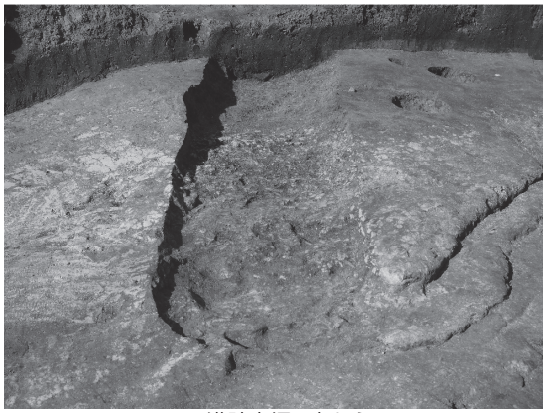
SI 2 竪穴住居跡遺物出土状況 (北から)


SI 2 竪穴住居跡 SK 1 断面 (北東から)


SI 2 竪穴住居跡 P 1 断面 (南西から)

写真図版 2


SD 5 溝跡断面 (東から)


SD 5 溝跡完堀 (東から)

SD 6 溝跡断面 (北東から)

SK 6 土坑断面 (北東から)

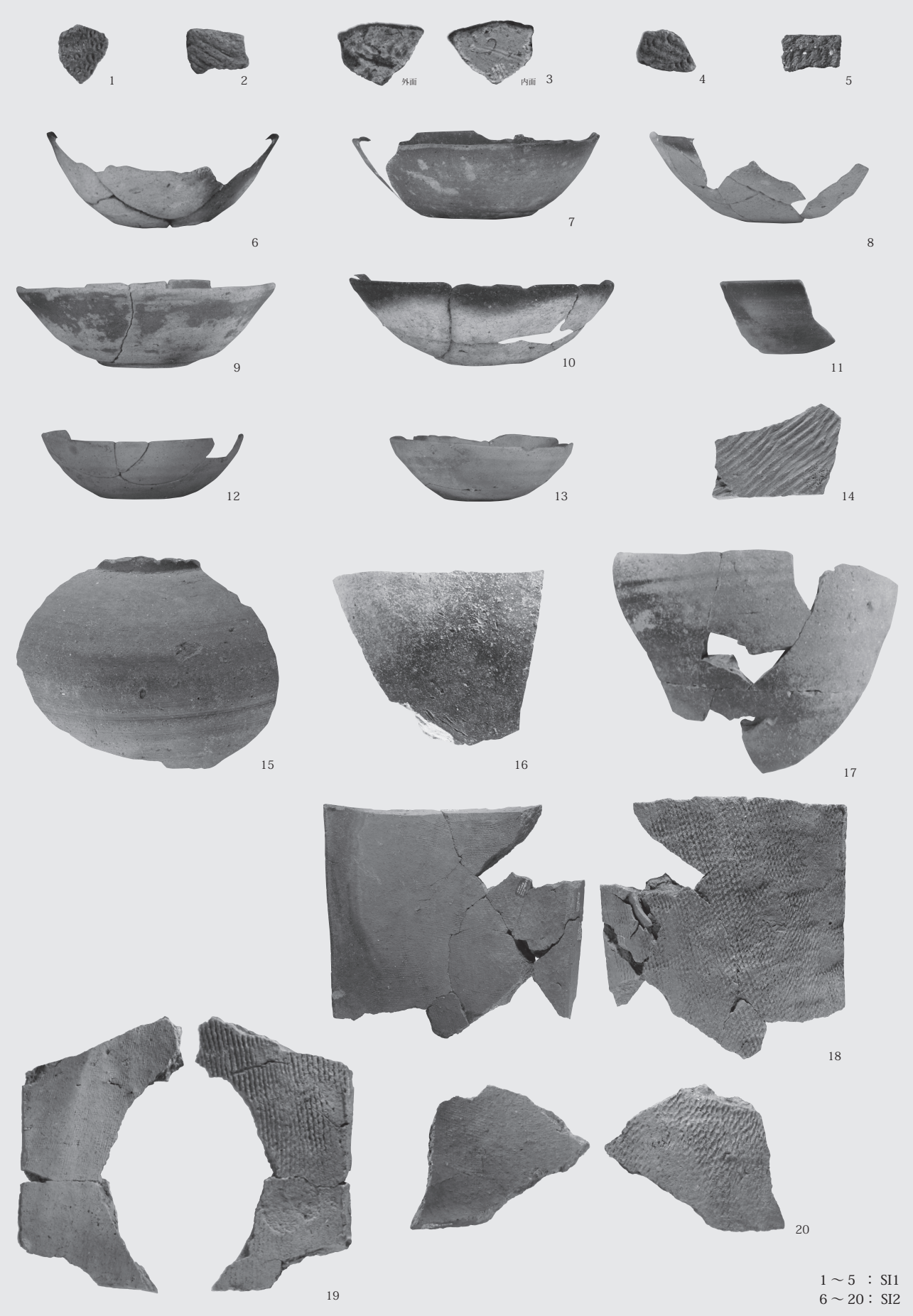
SK 6 土坑完堀 (北から)

SK9 土坑断面 (西から)

SK10 土坑完堀 (南西から)

Ⅳ区作業風景

写真図版 3



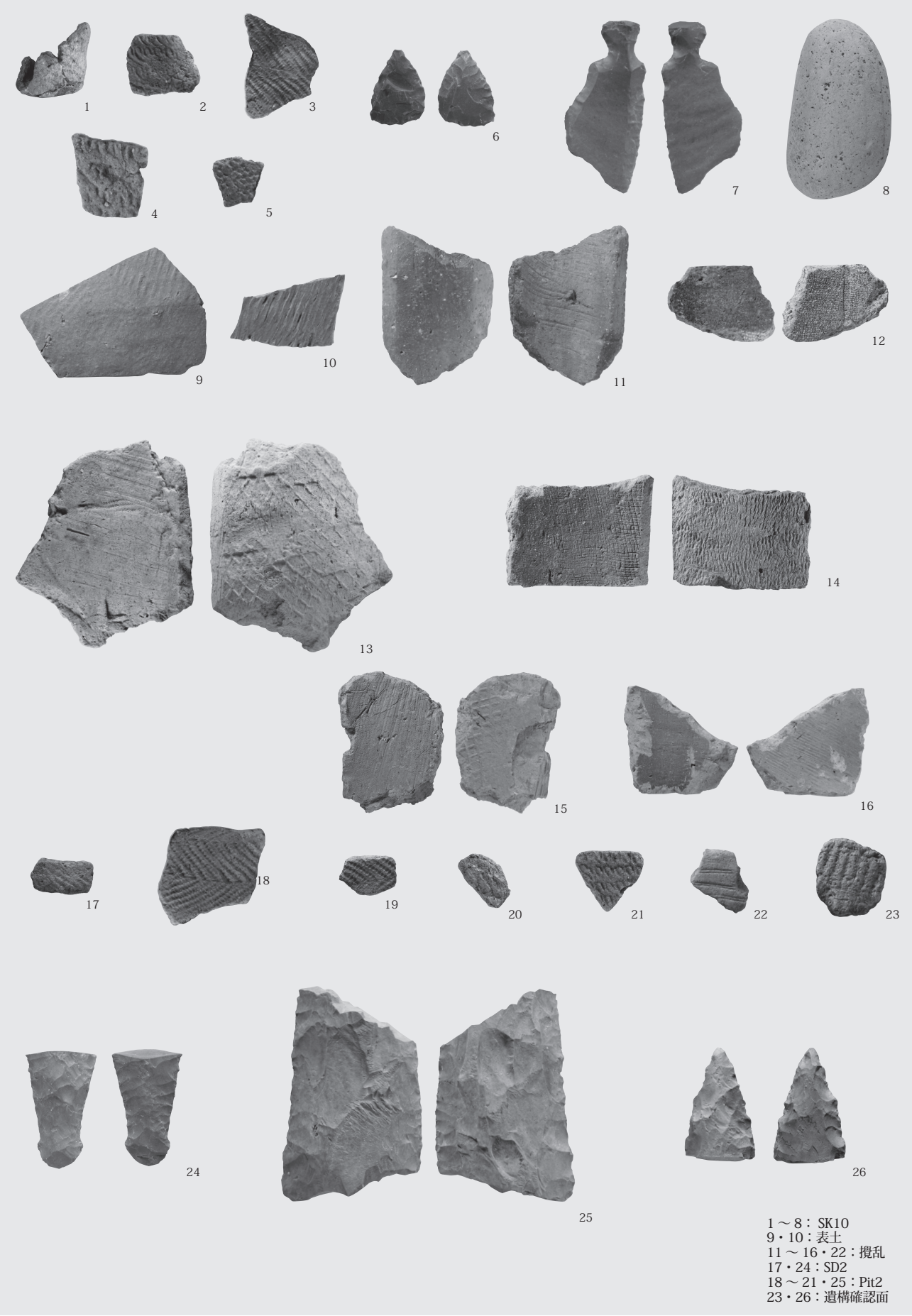
1～5 ：SI1
6～20：SI2

1～17 ：S≒1/3
18～20：S≒1/5

写真図版 4

写真図版 5

1～4・6 ： S≒1/5
5・7～21・23～34： S≒1/3
22：S≒2/3



1～8： SK10
9・10：表土
11～16・22：攪乱
17・24：SD2
18～21・25：Pit2
23・26：遺構確認面

写真図版 6

1～5・8～10・17～23 ： S≒1/3
6・7・24～26： S≒2/3
11～16：S≒1/5

報 告 書 抄 録

ふりがな	つばめさわいせきだい14じちょうさ
書　名	燕沢遺跡第14次調査
副書名	国道4号仙台バイパス拡幅工事に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第447集
編著者名	庄子裕美
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-0011　宮城県仙台市青葉区上杉1－5－12　TEL022-214-8839
発行年月日	2016年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
つばめさわいせき 燕沢遺跡	せんだいしみやぎのく 仙台市宮城野 つばめさわひがし 区燕沢東 さんちょうめちない 三丁目地内	04100	01001	38°　17′　27″	140°　56′　00″	20150901 ～ 20151130	540	道路拡幅工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
燕沢遺跡 第14次	散布地・ 集落跡・ 寺院跡	縄文時代 平安時代	竪穴住居跡 溝跡 土坑	縄文土器・ロクロ土師器・ 赤焼土器・須恵器・ 丸瓦・軒平瓦・平瓦・ 石器・金属製品	・縄文時代前期の竪穴住居跡を検出 ・平安時代の竪穴住居跡と区画溝を検出

要約

燕沢遺跡は、台原・小田原丘陵の最東端の段丘上にあり、標高は27～30ｍである。

今回の調査では、縄文時代前期前葉と古代の遺構を検出した。縄文時代前期前葉の遺構には竪穴住居跡と土坑があり、遺物は大木1式の縄文土器が出土している。古代の遺構には竪穴住居跡と溝跡があり、遺物はロクロ土師器と須恵器、瓦などが出土している。Ⅳ区で検出した溝跡は第8次調査で確認された溝跡の延長部分で、今回の調査ではこの溝跡の東端部が確認された。建物群を区画していたと考えられる。

仙台市文化財調査報告書第447 集

燕沢遺跡第14次調査

―国道4号バイパス拡幅工事に伴う発掘調査報告書―

2016年3月

発　行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区上杉1-5-12
文化財課 022(214)8839

印　刷　株式会社　東北プリント
仙台市青葉区立町24－24
022(263)1166